宮城県文化財調査報告書第101集

鹿島遺跡
竹之内遺跡

―七北田川流域自然堤防上の平安後期の土器群―

昭和59年3月

宮城県教育委員会

序

宮城県は、既設運転免許センター施設が狭隘かつ老朽化したため、昭和59年度完成をめざしてこれを泉市松森区に移し、新たに建設することとなった。その予定地利用面積は庁舎・試験コース・駐車場等111,528.70㎡に達する。

この建設予定地は、七北田川が形成した微高地で、奈良・平安期の土師器・須恵器を包含する竹之内遺跡として周知されているところから、全面盛土工を施すにしても、事前に遺跡の範囲と性格を把握する調査が必要であると判断された。

このため、昭和57年12月13日から18日までの6日間詳細分布調査を行い、つづいてその結果に基き昭和58年3月7日から26日までの16日間発掘調査を実施した。

本報告書は、調査によって確め得た鹿島・竹之内両遺跡の知見をまとめたものである。今後、学術研究をはじめ、学校・社会教育等々、大方のご活用をいただければ幸いである。

なお、極寒の時節、調査に協力をいただいた関係者の努力にたいし、末尾ながら特に記して心からの敬意と感謝を表する次第である。

昭和 59 年 3 月

宮城県教育委員会　教育長　三　浦　　徹

例　　言

1．　本書は宮城県運転免許センター建設に伴う鹿島遺跡･竹之内遺跡の発掘調査報告書である。
2．　調査の主体者は宮城県教育委員会である。
3．　発掘調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
4．　本書における土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1973）を、土性は国際土壌学会の粒径区分を参照した。
5．　本書第１図は建設省国土地理院発行の1/25,000地形図「仙台北東部」を複製したものである。
6．　整理・報告書の作成は文化財保護課が行い、佐々木和博が担当した。
7．　本遺跡の調査・整理に関する諸記録、出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

調査要項

遺跡所在地：鹿島遺跡：宮城県泉市市名坂字鹿島
　　竹之内遺跡：宮城県泉市市名城字竹之内
遺跡記号：鹿島遺跡（HH）竹之内遺跡（ＨＩ）
調査主任者：宮城県教育委員会
調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課
調査期間：第1次調査　昭和57年12月13日～12月18日
　　第2次調査　昭和58年3月7日～3月26日
調査対象面積：111,528m²
発掘面積：　8,154m²
調　査　員：平沢英二郎・狩野正昭・丹羽茂・斎藤吉弘・佐々木和博・菊池逸夫
調査協力機関：泉市教育委員会

目　　次

Ⅰ．遺跡の位置と環境 1
Ⅱ．調査の方法と経過 1
Ⅲ．調査の成果 6
1．基本層位 6
2．発見された遺構と遺物 6
(1) 竪穴住居跡 6
(2) 掘立柱建物跡 11
(3) 柱 列 跡 12
(4) 溝　　跡 13
(5) 土　　壙 18
3．その他の遺構 29
Ⅳ．出土遺物の検討 32
1．土器の分類 32
2．土器の共伴関係と編年的位置 34
(1) 共伴関係 34
(2) 編年的位置 34
3．その他の遺物 39
Ⅴ．遺構と遺跡の検討 40

Ⅰ．遺跡の位置と環境（第1図）

鹿島遺跡・竹之内遺跡は泉市東南部、仙台バイパス泉大橋の東約200m～600mに位置する。

泉市東南部は北は西から東のびる富谷丘陵の西南部、南は西から東にのびる七北田丘陵の東部によって挟まれ、この二丘陵を開析して七北田川が曲流しながら東流する地域である。七北田川の谷には4段の河岸段丘がみられる（経済企画庁：1967）。この河岸段丘は泉大橋の西約1,500mにある七北田橋より上流（西）で顕著にみられるが、下流（東）では小規模な中位・下位段丘が断続的にみられるだけである。また七北田橋付近から下流（東）には氾濫原（谷底平野）・自然堤防・後背湿地・旧河道が拡がる南北幅1km～1.5kmの七北田低地がみられる。

鹿島遺跡・竹之内遺跡は七北田川左岸の自然堤防上に東西に並んで立地する。両遺跡の北側には東西方向の弧状を呈する後背湿地がみられ、さらに両遺跡の間には南北方向の後背湿地がみられる。したがって、両遺跡はそれぞれ独立した小規模な自然堤坊上に立地していることになる。

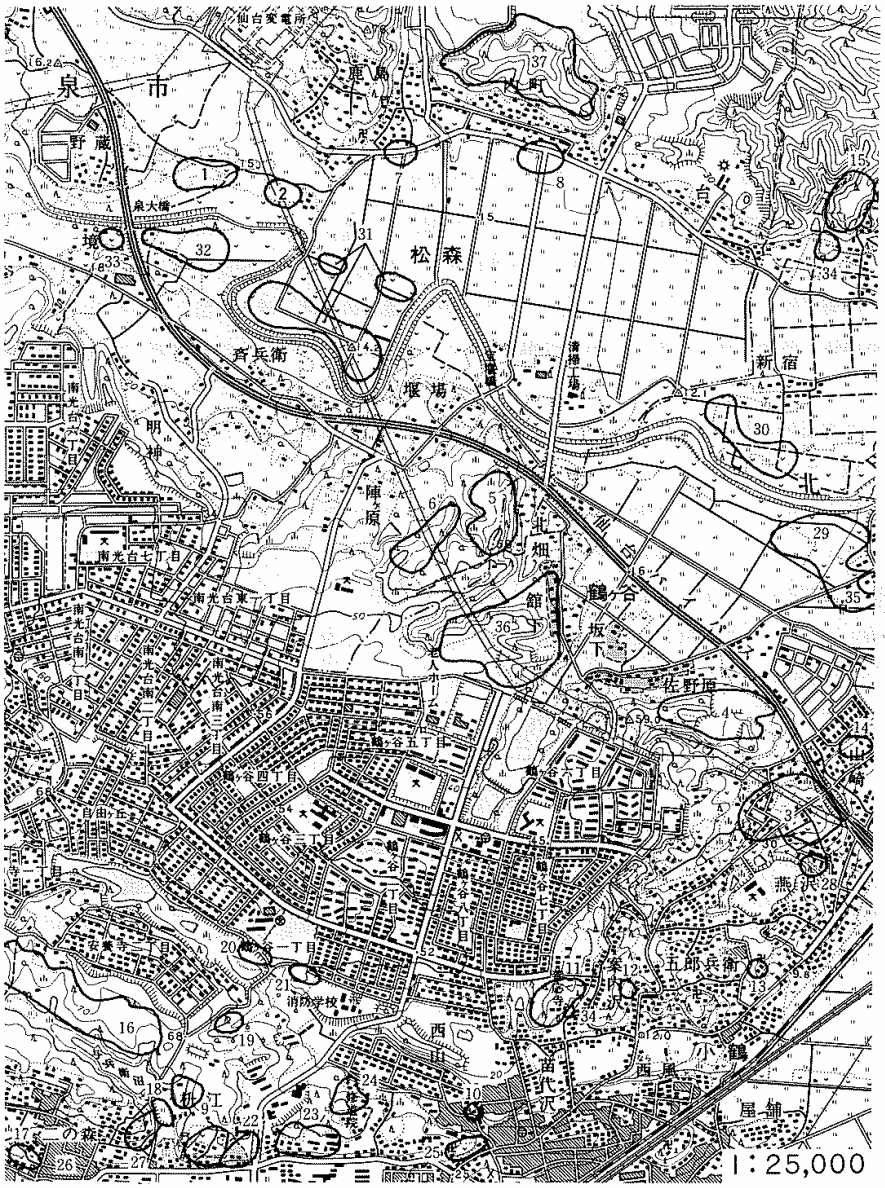
両遺跡の立地する自然堤防は畑地として、また後背湿地は水田として利用されている。なお畑地の一部には盛土が行われている。

両遺跡の周辺には縄文時代・古墳時代～中世の遺跡が分布している。縄文時代の遺跡は丘陵縁辺や段丘に分布する（遺跡№3～8）。古墳時代の遺跡は丘陵縁辺に古墳・横穴古墳の分布がみられる。（遺跡№10～15）ものの集落遺跡については不明な部分が多い。なお、古墳時代の窯跡として大蓮寺窯跡（№25）がある。奈良・平安時代には七北田丘陵の南斜面を中心に台ノ原・小田原窯跡（№16～25）が形成され、多賀城・陸奥国分寺などに供給されている。この窯跡群の東には燕沢遺跡（№3）があり掘立柱建物跡・古瓦・漆紙文書などが発見されている。集落遺跡は七北田丘陵の東・北側縁辺（遺跡№3～8）や段丘（遺跡№7・8・34）に分布するばかりでなく、自然堤防上も分布（遺跡№29～33）する。中世には館跡が丘陵上（遺跡№36・37）や自然堤防上（遺跡№31）に分布する。

このように両遺跡の周辺では奈良・平安時代以降、自然堤防への遺跡の立地が顕著になることが知られる。両遺跡もまた同様の傾向の中で捉えることが可能であろう。

Ⅱ．調査の方法と経過（第2図）

鹿島遺跡・竹之内遺跡とも調査区は国家座標第Ⅹ系 Ｘ＝－187,600 Ｙ＝＋6,700 を原点とし、国家座標の方向を基線として設定した。調査区は一辺 60m 単位の大グリットで両遺跡の全域を区画し、さらにそれぞれの大グリット内に一辺 3mの小グリットを区画し設定した。グリット名は東西方向をアラビア数字で、南北方向をアルファベットで示した。



No	遺跡名	7	清水寺前遺跡	14	千人塚古墳	21	安養寺中開瓦窯跡	28	吉沢遺跡	35	稲荷館跡
1	鹿島遺跡	8	城前遺跡	15	大生沢横穴古墳群	22	神明社瓦窯跡群	29	岩切畑中遺跡	36	笹森城跡
2	竹之内遺跡	9	神明社裏遺跡	16	与兵衛沼窯跡	23	土手前窯跡	30	大正開遺跡	37	新道遺跡
3	燕沢遺跡	10	窯内古墳	17	庚申前窯跡	24	安養寺下窯跡	31	館遺跡		
4	萩蒲沢遺跡	11	善応寺横穴古墳群	18	二ノ森窯跡	25	大蓮寺窯跡	32	上河原遺跡		
5	北畑遺跡	12	比丘尼塚古墳	19	安養寺配水場前窯跡	26	庚申前遺跡	33	境遺跡		
6	長岫遺跡	13	糠塚古墳	20	三高西側斜面窯跡	27	二ノ森遺跡	34	寒古碑		

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

調査は建物および道路建設予定地内は事前調査を、その他の部分については盛土保存がなされることから確認調査のみを行うこととした。したがって鹿島遺跡は事前・確認調査を行い、竹之内遺跡は確認調査のみを行うこととした。調査は第一次・第二次にわけて実施した。

第一次調査

昭和57年12月13日から実施した。鹿島遺跡の規模・時代等を把握するための詳細分布調査である。事前調査対象区10箇所をトレンチにより調査したところ7箇所は湿地であり、遺構・遺物は検出されなかった。他の3箇所は自然堤防止にあり住居跡・溝跡が検出された。さらに事前調査区外にもトレンチを入れ、自然堤防の規模・遺跡の範囲の確認に努めた。その結果、自然堤防は南北約80㎜であり、東限は明確ではないが、西限は把握することができた。遺跡からは土師器・須恵器・赤焼土器が出土したことから、その大略の年代を捉えることができた。

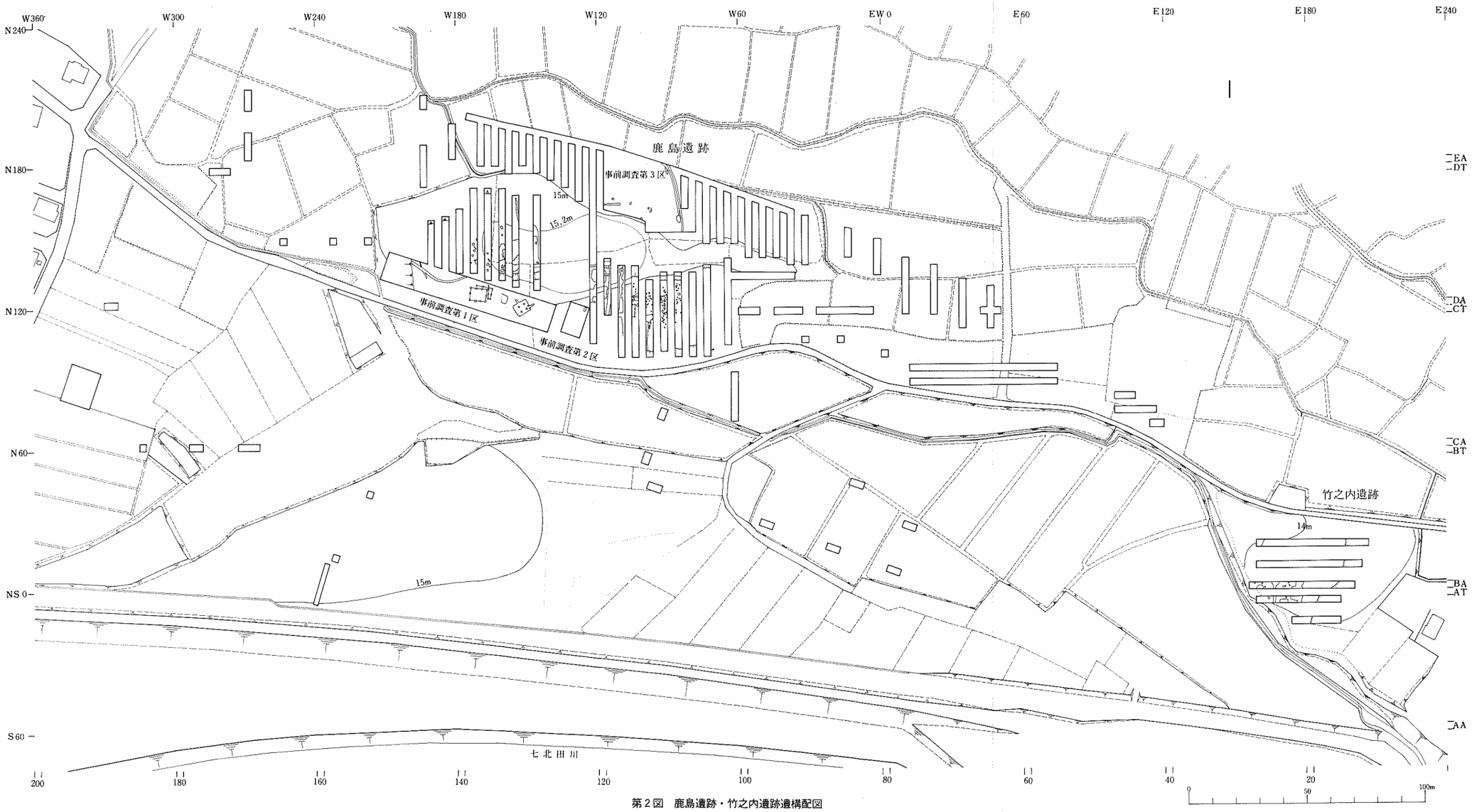
調査面積は1,830㎡である。昭和57年12月18日に第一次調査を終了した。

第二次調査

昭和58年3月7日から実施した。鹿島遺跡の事前調査対象区3箇所を同第1～3区として遺構精査を行った。事前調査対象第1区では竪穴住居跡2軒・掘立柱建物跡1棟・柱穴列跡2列・溝跡2条が検出され、また同第2区では土師器甕を埋置した土壙1基が検出され、それぞれ精査を行った。同第3区では竪穴住居跡1軒・溝跡5条・土壙4基が検出され、精査を行った。

確認調査は、自然堤防部分においては幅3㎜のトレンチを3㎜間隔で設定することを基本とし、低湿地部分については、幅3㎜のトレンチを9㎜間隔で設定することを基本とした。その結果、鹿島遺跡は東西約150㎜・南北約80㎜の自然堤防上に立地し、ＤＡ～ＤＴ－110～135グリッドに竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壙・ピットなどの遺構がまとまって存在することが明らかになった。さらにＥＡ・ＥＢ－116～119グリッドでは包含層が検出された。竹之内遺跡は東西・南北ともに約40㎜の自然堤防上に立地し、竪穴住居跡・炭化物を含むピット・溝跡・土壙などの遺構はＡＳ～ＢＡ－21～28にまとまって存在することが明らかになった。なお、炭化物を含むピットの1つには土師器甕を倒位に埋置したものがある。

鹿島遺跡・竹之内遺跡の調査面積は6,324㎡である。昭和58年3月26日に第二次調査を終了した。



第2図　鹿島遺跡・竹之内遺跡遺構配図

Ⅲ. 調査の成果

1．基本層位

自然堤防の中央部では約40㎝～50㎝の黒褐色土がみられる。黒褐色土の下は黄褐色の地山である。自然堤防が湿地へ移行する箇所では黒褐色土の下に青緑色のグライ化した層が認められる。

2．発見された遺構と遺物

事前調査により精査が行われた鹿島遺跡の遺構と遺物について、以下記述する。なお遺構の確認面はすべて地山面である。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡　（第3図）

〔平面形・規模〕削平が著しく平面形は不明である。規模は残存床面等から東西3.2m以上・南北2.6m以上である。

〔堆積土〕住居内堆積土は2層にわかれる。第1層は住居跡全体に分布し、第2層は東半部に分布する。自然流入土である。

〔壁〕東壁の一部を検出したのみである。地山を壁としている。床面からの立ちあがりは緩かで、確認面からの高さは約3㎝である。その他の壁は削平されている。

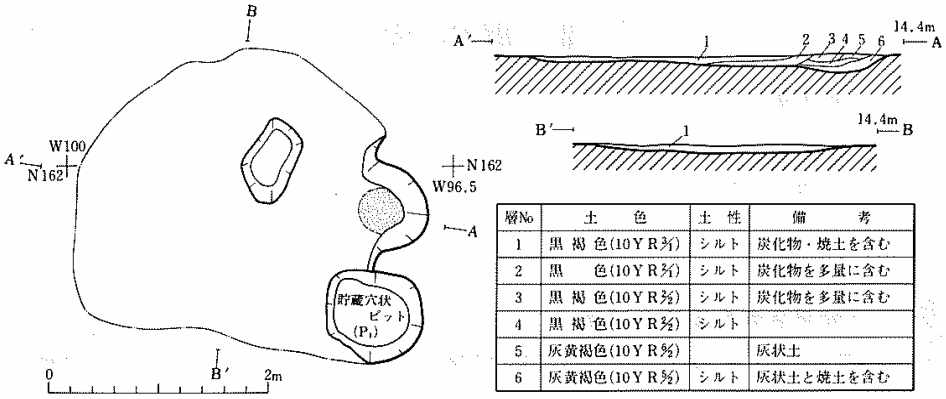
〔床面〕削平により床面の全容は不明であるが、残存部分では地山を床面とし、ほぼ平坦である。

〔カマド〕東壁を掘り込んでカマドが作られている。燃焼部は幅40㎝・奥行40㎝である。底面は火熱を受けて焼けている。奥壁の立ちあがりは緩かである。側壁は北側で検出されたが、南側では不明である。煙道は検出されていない。

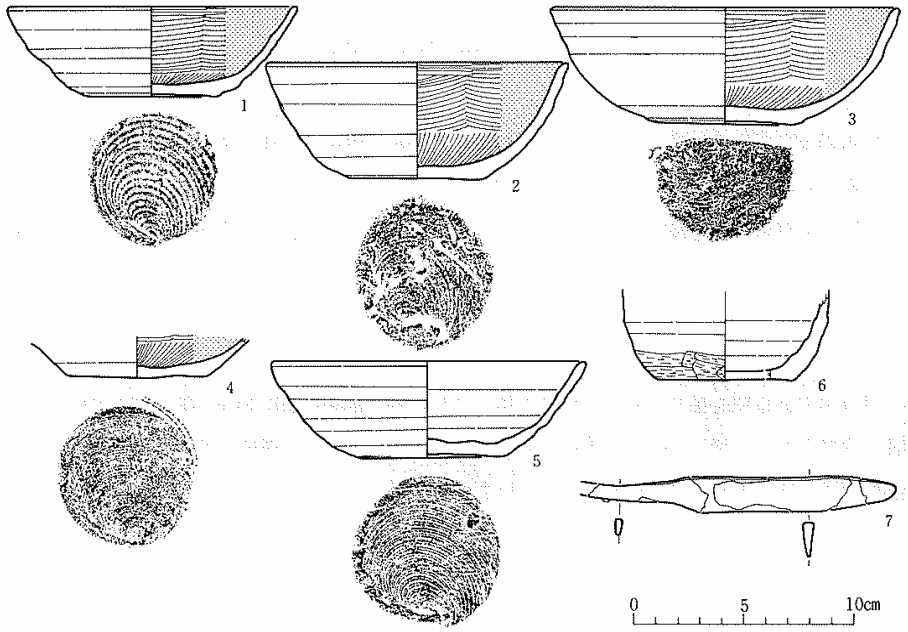
〔貯蔵穴状ピット〕カマドの南にあり、東壁を掘り込んでいる（P_1）。楕円形を呈し、規模は東西90㎝・南北80㎝・深さ15㎝である。

〔その他の施設〕カマドの西約1mに略長方形のピットがある（P_2）。規模は短辺40㎝・長辺50～60㎝・深さ20㎝である。

〔出土遺物〕土師器・須恵器・赤焼土器・鉄製品がある。住居跡に伴うと考えられる遺物にはカマド内出土の須恵器坏（5）・貯蔵穴状ピット内出土の土師器坏（1）・ピット2出土の土師器坏（2）がある。堆積土出土の遺物には土師器坏（3）・鉄製品〈刀子〉（7）がある。なお、この他に堆積土からは赤焼土器破片が出土している。



層No	土　色	土 性	備　考
1	黒 褐 色(10YR3/1)	シルト	炭化物・焼土を含む
2	黒　色(10YR3/1)	シルト	炭化物を多量に含む
3	黒 褐 色(10YR3/2)	シルト	炭化物を多量に含む
4	黒 褐 色(10YR3/2)	シルト	
5	灰黄褐色(10YR5/2)		灰状土
6	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	灰状土と焼土を含む



遺 物 観 察 表

単位：mm

No	器形	層　位	特　徴	口径	底径	器高	残存	分類	登　録
1	坏	ピット1	外面口縁・体部：ロクロナデ　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り	(132)	61	41		I	住1−1
2	坏	ピット2	外面口縁・体部：ロクロナデ　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り	(137)	64	52		I	住1−4
3	坏	堆1・2	外面口縁・体部：ロクロナデ　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り	(158)	(71)	52		I	住1−3
4	坏	堆1・2	外面体部：ロクロナデ　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り		65				住1−2
5	坏	カマド	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り	142	68	43	3/3		住1−6
6	小形甕	堆1・2	内外面胴部：ロクロナデ　外面胴部下端：手持ヘラケズリ　底部：回転糸切り		(62)		1/4		住1−5
7		堆1	刀子						住1

＊ 1〜4・6土師器　5須恵器　7鉄製品

第3図　第1号住居跡・出土遺物

第2号住居跡（第4図）

〔平面形・規模〕平面形は方形で、規模は東西6.3m・南北5.3mである。

〔堆積土〕住居跡内堆積土は3層にわかれる。第1層は住居跡中央部から東南部にかけて断続的に分布している。第2層は住居跡中央部から東側に分布している。第3層は住居跡を中心に分布している。第4層は壁際を中心に分布している。自然流入土である。

〔壁〕地山を壁とし、床面からほぼ垂直に立ちあがる。壁高は遺存の良い北壁中央部で25cmである。

〔床面〕地山を床面とし、ほぼ平坦である。床面中央部に2箇所の焼面がある。

〔柱穴〕柱穴は4個（P_1～P_4）検出された。柱穴の東西方向（P_1－P_3・P_2－P_4）は壁に平行であるが、南北方向（P_1－P_2・P_3－P_4）は壁に平行ではない。P_5はカマド北側壁近くにあるが、カマドとの関連は不明である。

〔カマド〕カマドは新旧二時期認められる。新しいカマドは燃焼部と煙道部からなり、東壁の南側から約1/3の位置に設置されている。カマドの主軸線を西に延長するとP_2・P_4の柱痕跡に乗る。燃焼部は幅70cm・奥行110cmで底面はやや凹み、火熱を受けて焼けている。側壁は粗割り加工を施した凝灰岩で構築し、その外側に粘土を積み上げている。煙道は天井部が崩れているがトンネル式のもので、先端に向って緩かにのぼっている。煙道部の先端はピット状に丸くし、煙出しとしている。幅25cm・長さ130cmである。

旧いカマドは北壁の中央にあり、煙道部のみ検出された。煙道は天井が崩れているがトンネル式のもので、底面はほぼ平坦である。煙道部の先端はピット状に丸くし、煙出しとしている。幅23cm・長さ125cmである。

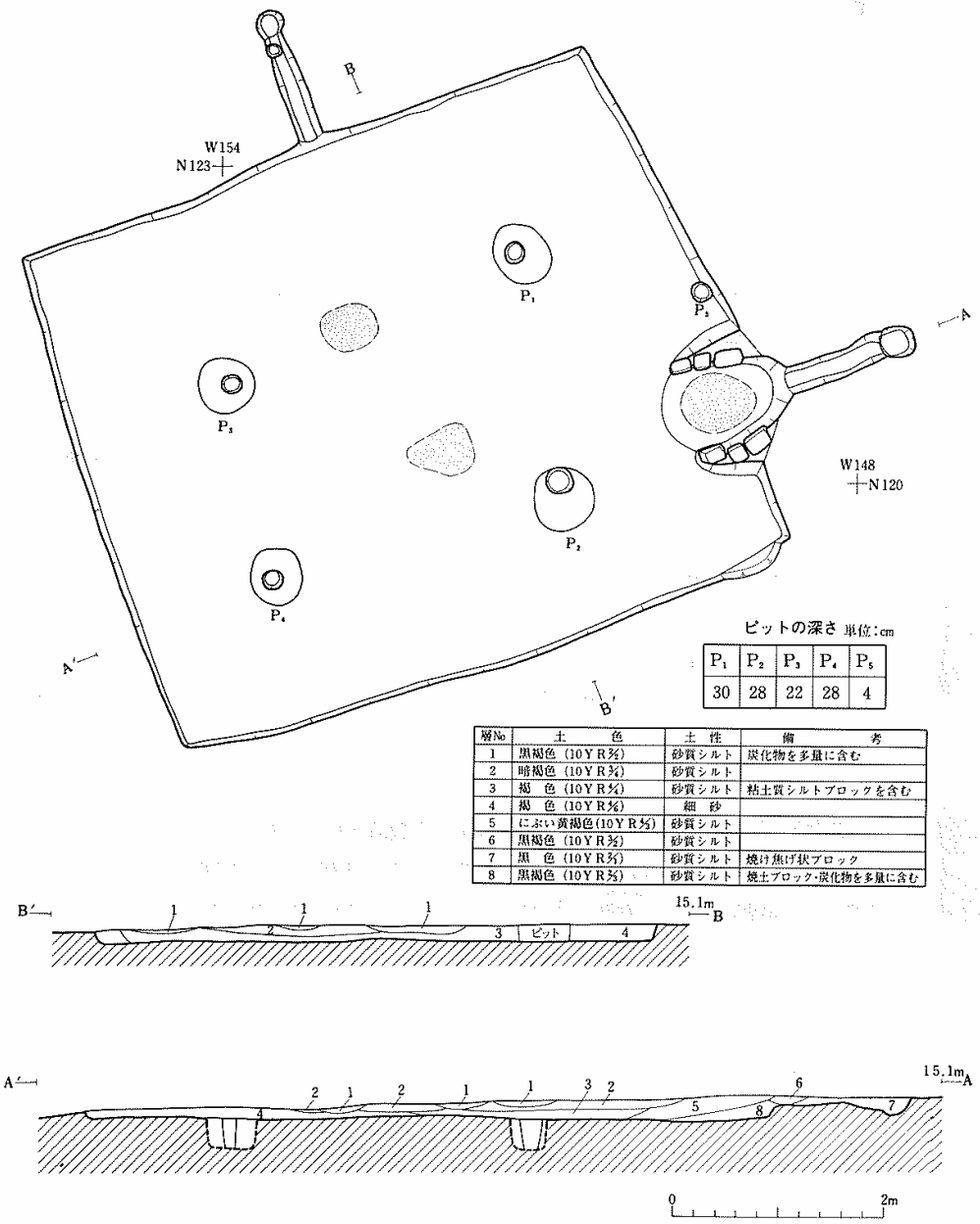
〔出土遺物〕（第5図）　土師器・須恵器・赤焼土器・鉄製品がある。住居跡に伴うと考えられる遺物には、カマド内出土の土師器甕（6・7）・須恵器坏（2）、床面出土の土師器高台付坏（1）・土師器甕（5）・須恵器坏（4）、鉄製品（10）がある。この他に床面から赤焼土器坏破片が出土している。堆積土出土の遺物には須恵器坏（3）・鉄製品〈刀子〉（8・9）がある。

第３号住居跡（第6図）

〔平面形・規模〕西側が削平されているが、残存部分から平面形は方形と推定される。規模は東西3.5m以上・南北3.5mである。

〔堆積土〕住居跡内堆積土は3層にわかれ、第1層は住居跡東側に、第2層は住居跡全体に、第3層は壁際を中心にそれぞれ分布している。自然流入土である。

〔壁〕地山を壁とし、床面からの立ちあがりは急である。壁高は遺存のよい北壁で約10cmである。

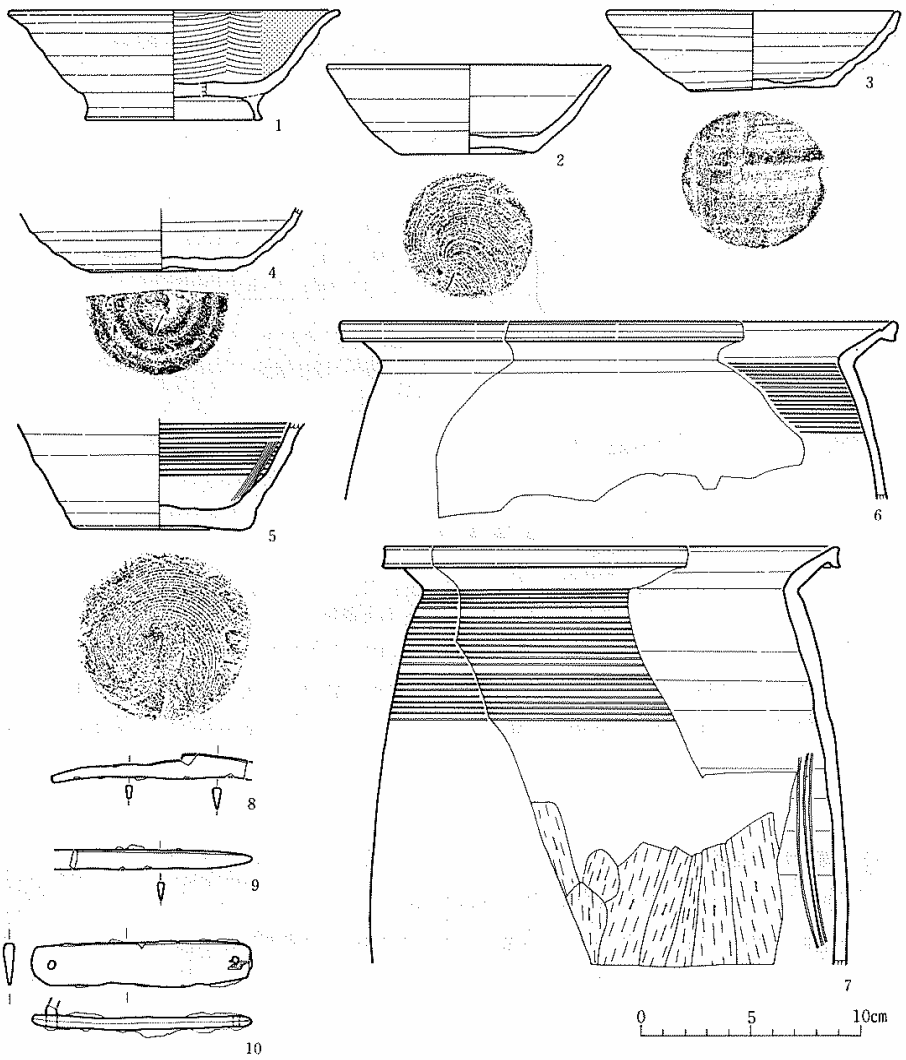


ピットの深さ 単位:cm

P_1	P_2	P_3	P_4	P_5
30	28	22	28	4

層No	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色（10YR2/2）	砂質シルト	炭化物を多量に含む
2	暗褐色（10YR3/4）	砂質シルト	
3	褐　色（10YR4/4）	砂質シルト	粘土質シルトブロックを含む
4	褐　色（10YR4/6）	細　砂	
5	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質シルト	
6	黒褐色（10YR3/2）	砂質シルト	
7	黒　色（10YR2/1）	砂質シルト	焼け焦げ状ブロック
8	黒褐色（10YR3/2）	砂質シルト	焼土ブロック・炭化物を多量に含む

第4図　第2号住居跡



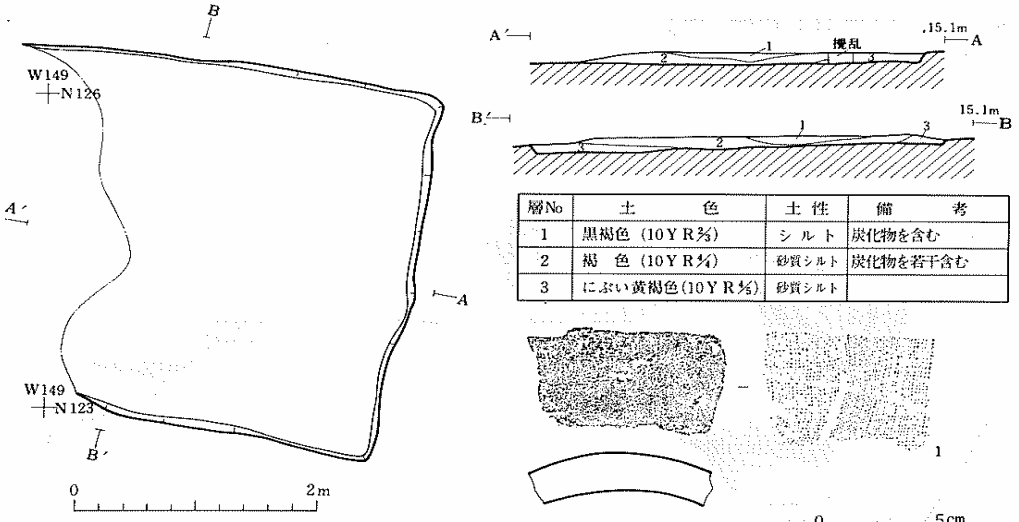
遺物観察表

単位：mm

No	器形	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	分類	登録
1	高台付坏	床直	外面口縁・体部：ロクロナデ　内面体部：ヘラミガキ　体部・底部：黒色処理　高台：B類	151		51	½	I	住2－4
2	坏	カマド	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り	129	61	41	¾		住2－2
3	坏	堆3	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：手持ヘラケズリ	133	66	37	⅔		住2－1
4	坏	床直	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：ヘラキリ		63				住2－3
5	甕	床直	外面胴部：ロクロナデ　内面胴部：刷毛目　底部：回転糸切り		81				住2－10
6	甕	カマド	外面口縁～胴部：ロクロナデ　内面胴部：刷毛目	(253)				I	住2－9
7	甕	カマド	外面口縁：ロクロナデ　外面胴部：刷毛目　内面口縁～胴部：ロクロナデ	(207)				I	住2－8
8		堆1	刀子　現存全長87、茎長58						住2
9		堆1	刀子　現存全長82						住2
10		床直	穂摘み具　全長100　幅21						住2

＊ 1・5～7土師器　2～4須恵器　8～10鉄製品

第5図　第2号住居跡出土遺物



層No	土　　色	土 性	備　　考
1	黒褐色（10YR2/3）	シルト	炭化物を含む
2	褐　色（10YR4/4）	砂質シルト	炭化物を若干含む
3	にぶい黄褐色（10YR5/3）	砂質シルト	

遺物観察表

No	種類	層　位	特　　徴
1	丸瓦	堆1・2	凸面：ヨコナデ　凹面：布目　粘土紐痕

第６図　第３号住居跡・出土遺物

〔床面〕地山を床面として、ほぼ平坦である。南側に向ってわずかに傾斜する。

〔出土遺物〕土師器（坏・甕）・須恵器（坏・甕）・赤焼土器（坏）・瓦（1）の破片が少量ある。

いずれも住居跡内堆積土第1・2層から出土している。土師器坏は製作にロクロを使用し、内面にヘラミガキ・黒色処理を行ったものである。

(2) 掘立柱建物跡（第７図）

〔重複〕第1号柱列跡のP_{15}にP_4が切られている。

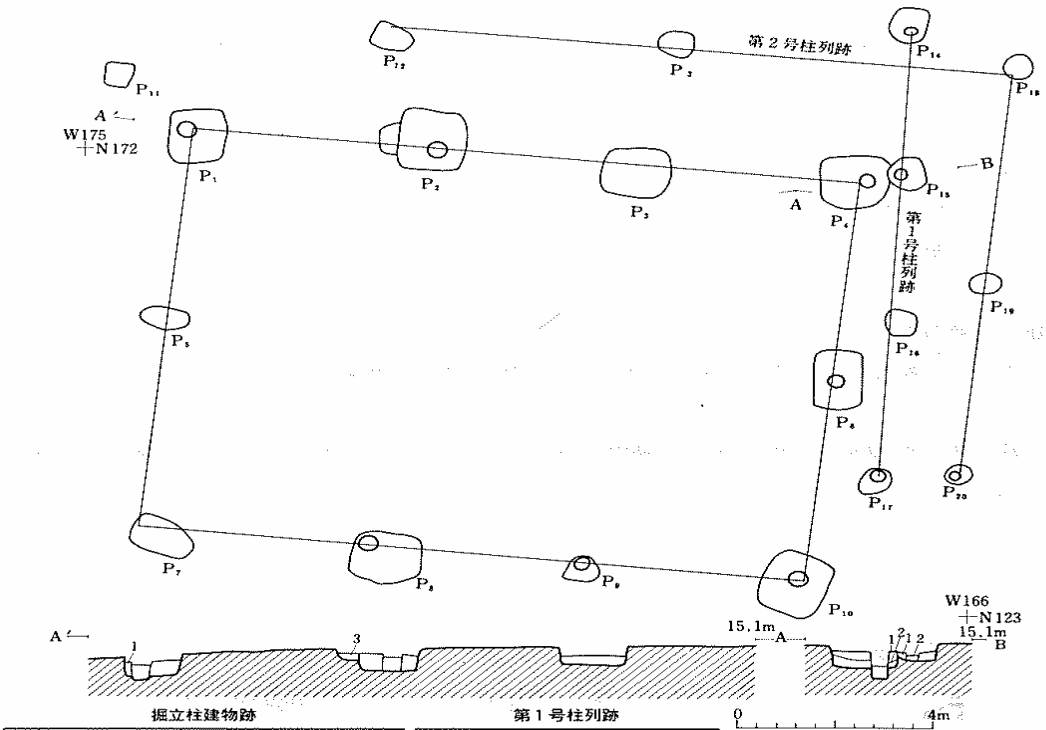
〔平面形・規模〕桁行3間（6.8m）・梁行2間（5.16m）の東西棟である。

〔掘り方〕P_5・P_7・P_9を除く掘り方は一辺60cm～70cm方形を呈し、検出面からの深さは16cm～28cmでほぼ垂直に掘られている。P_5・P_7は楕円形を、またP_9は不整円形を呈する。検出面からの深さはそれぞれ4cmである。各掘りり方底面のレベルは一定ではない。

〔掘り方埋土〕掘り方埋土は2層にわかれる。第1層は灰黄褐色シルト、第2層はにぶい黄褐色シルトである。第1・2層には灰黄褐色の火山灰ブロックが含まれている。

〔柱痕跡〕7個検出された直径15cm～20cmの円形である。

〔柱間寸法〕柱間寸法は北側柱列西から2.55m＋(2.18m)＋(2.18m)・南側柱列西から(2.30m)＋2.25m＋2.25m・東側柱列北から2.58m＋2.58m・西側柱列北から（2.55m）＋（2.60m）である。



掘立柱建物跡

層No	土色	土性	備考
1	灰黄褐色（10ＹＲ5/2）	シルト	灰黄褐色火山灰ブロックを含む
2	にぶい黄褐色（10ＹＲ5/3）	シルト	灰黄褐色火山灰ブロックを含む
3	黒褐色（10ＹＲ3/2）	シルト	

第１号柱列跡

層No	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色（10ＹＲ5/3）	シルト	
2	暗褐色（10ＹＲ3/3）	シルト	

第７図　掘立柱建物跡・第1・2号柱列跡

〔建物方向〕東側柱痕跡を通る軸線の方向はN－6°－Eである。

〔出土遺物〕掘り方埋土から土師器（坏・甕）・須恵器（坏・甕）・赤焼土器（坏）の小破片、鉄滓が出土している。土師器は製作にロクロを使用したものであり、底部回転糸切り無調整の坏が1点ある。

(3) 柱列跡（第７図）

掘り方・柱痕跡はあるが、掘立柱建物跡とはならない。しかし、その配列から一組の遺構と捉えられる。ここでは、このような遺構を柱列跡として、以下記述する。

第1号柱列跡

〔重複〕P_{15}が掘建柱建物跡のP_4を切っている。

〔規模〕南北3間（5.7m）以上である。

〔掘り方〕P_{14}～P_{16}は方形を基調とし、一辺30cm～45cmである。P_{17}は楕円形で、長径40cm短径30cmである。

〔掘り方埋土〕掘り方埋土は1層で灰黄褐色火山灰ブロックを含むにぶい黄褐色シルトである。

〔柱痕跡〕 P_{14}・P_{15}・P_{17}で検出された。直径10㎝～15㎝である。

〔柱間寸法〕北側から1.85m＋（1.85m）＋2.00mである。

〔柱列方向〕柱列方向はN－3°－Eである。

〔出土遺物〕掘り方埋土から土師器（坏・甕?）・赤焼土器（坏）の小破片が出土している。土師器坏は製作にロクロを使用し内面黒色処理を行ったものである。

第2号柱列跡

〔平面形・規模〕「L」字状に直角に折れる柱列跡である。規模は北側柱列が2間（6.32m）・東側柱列が2間（5.17m）である。

〔掘り方〕 P_{12}を除き円形である。直径は30㎝～35㎝である。P_{12}は長方形を基調とするもので、長辺40㎝・短辺30㎝である。

〔掘り方埋土〕灰黄褐色火山灰ブロックを含む。

〔柱間寸法〕北側柱列は西から（2.90m）＋（3.42m）であり、東側柱列は北から（2.70m）＋（2.47m）である。

〔柱列方向〕東側柱列の方向はN－5°－Eである。

〔出土遺物〕掘り方埋土から土師器（甕）・須恵器（坏・甕）・赤焼土器（坏）の小破片が出土している。須恵器坏・赤焼土器坏はともに回転糸切り無調整のものである。

(4)　溝　跡（第８図）

第1号溝跡

〔重複〕第2号溝跡を切っている。

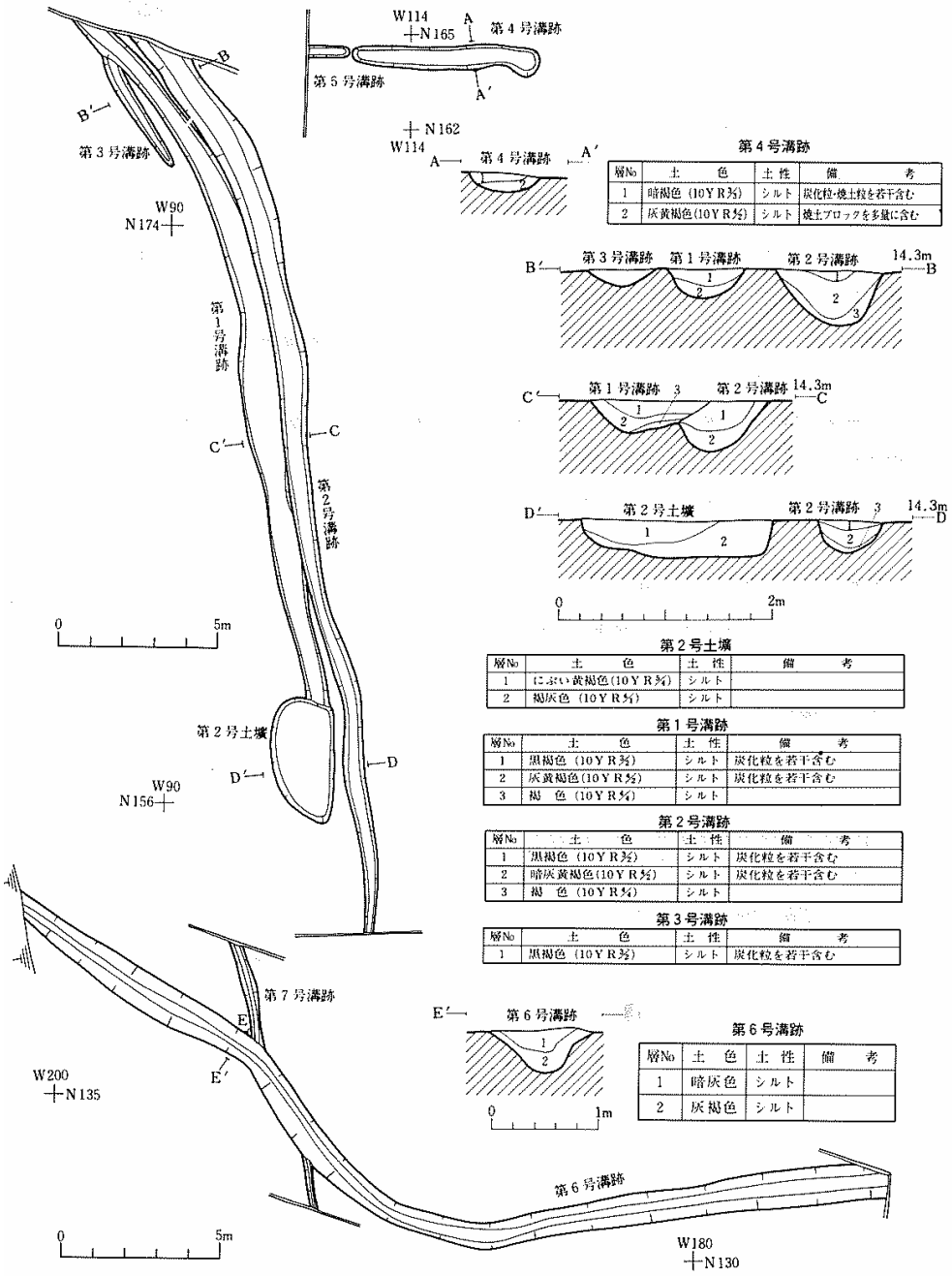
〔方向〕溝の方向はN－10°～35°－Wである。緩かな弧を描き調査区外（北）にのびる。南端は第2号土壙のために不明である。

〔堆積土〕溝内堆積土は3層にわかれる。第1・2層は溝全体に厚く、第3層は溝底面を中心に薄くそれぞれ堆積している。自然流入土である。

〔幅・深さ〕溝の上端部は60㎝～130㎝、上端幅は40㎝～110㎝、深さは10㎝～40㎝である。

〔底面・壁〕溝の底面は皿状で、北に向ってわずかに低くなる。壁の立ちあがりは緩かである。断面形は「U」字状である。

〔出土遺物〕（第9図）土師器・須恵器・赤焼土器・瓦がある。遺物は第1層から多く出土し、第2層は少なく、第3層にはない。土師器には坏（2）・高台付坏（1・3）がある。赤焼土器には小皿（5）・高台付坏（6・7）がある。瓦（10・11）は平瓦である。この他に土師器（甕）・須



第4号溝跡

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化粒・焼土粒を若干含む
2	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	焼土ブロックを多量に含む

第2号土壙

層No	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	
2	褐灰色（10YR5/1）	シルト	

第1号溝跡

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	炭化粒を若干含む
2	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	炭化粒を若干含む
3	褐色（10YR5/4）	シルト	

第2号溝跡

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	炭化粒を若干含む
2	暗灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	炭化粒を若干含む
3	褐色（10YR5/4）	シルト	

第3号溝跡

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	炭化粒を若干含む

第6号溝跡

層No	土色	土性	備考
1	暗灰色	シルト	
2	灰褐色	シルト	

第8図　第1～6号溝跡・第2号土壙

恵器（坏・甕）の小破片が出土している。なお、坏の底部はすべて回転糸切り無調整である。

第2号溝跡

〔重複〕第1号溝跡によって切られている。

〔方向〕第1号溝跡に平行する。溝の方向はN－10°～35°－Wである。緩かな曲線を描き調査区外（南北）にのびる。

〔堆積土〕溝内堆積土は3層にわかれる。第1層は溝中央部に薄く、第2層は溝全体に厚く、第3層は溝全体に薄くそれぞれ堆積している。自然流入土である。

〔幅・深さ〕溝の幅は南側が狭く、北に向かって広くなる。上端幅は30cm～100cm・下端幅は15cm～60cm・深さは20cm～50cmである。

〔底面・壁〕溝の底面は皿状で、北に向ってやや低くなる。壁の立ちあがりやや急である。断面形は「U」字状である。

〔出土遺物〕（第10図）土師器・須恵器・赤焼土器・鉄製品がある。遺物は第1層から多く出土し、第2層からは少なく、第3層にはない。土器はすべて小破片で図示できるものはないが、土師器には坏・高台付坏・甕、須恵器には坏・甕、赤焼土器には小皿・坏・高台付坏がある。なお、坏の底部は回転糸切り無調整である。鉄製品には鉄鏃（1）と刀子（2）がある。

第3号溝跡

〔重複〕溝の北端で第1号溝跡に接するが重複関係は不明である。

〔方向〕溝の方向はN－30°－Wである。

〔堆積土〕溝の堆積土は1層である。

〔幅・深さ〕上幅約30cm、下端約20cm、深さ約10cmである。

〔底面・壁〕溝の底面は皿状を呈し、壁は緩かに立ちあがる。

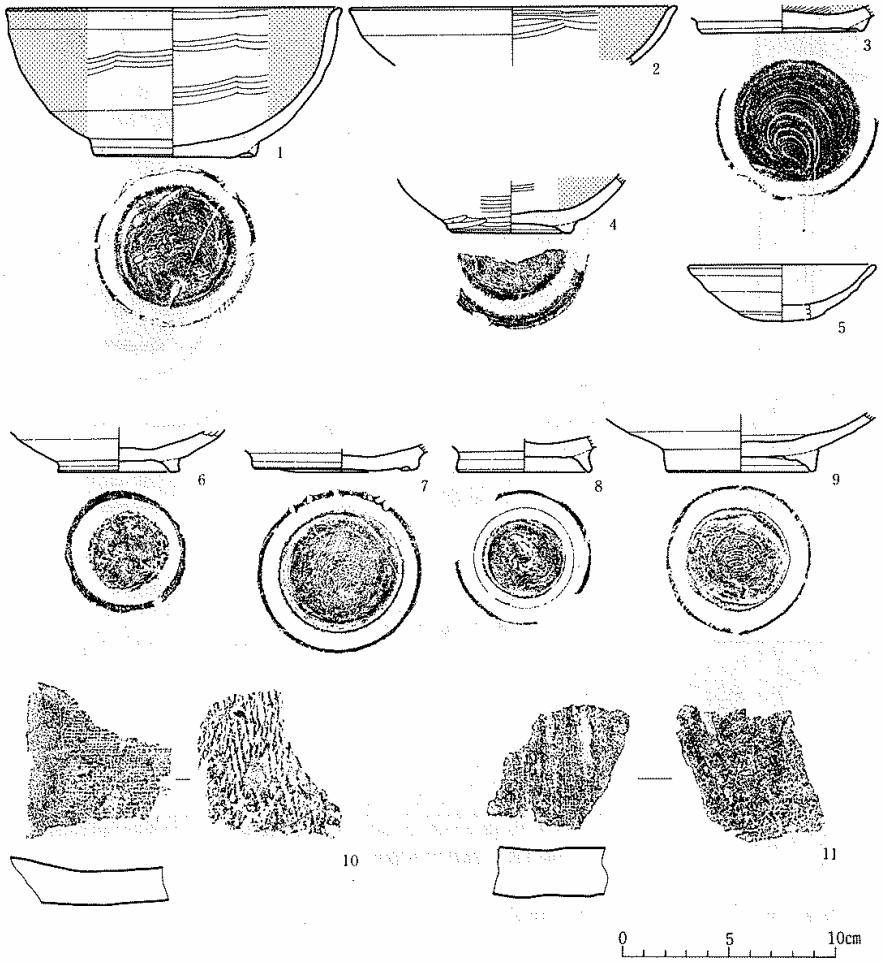
〔出土遺物〕出土遺物は少量で、土師器（坏・甕）・須恵器（坏・甕）・赤焼土器（坏）があるが、小破片のため図示できるものはない。なお、須恵器坏には底部回転糸切り無調整のものが1点ある。

第4号溝跡

〔方向・長さ〕溝の方向はN－90°－Wで、長さは5.9mである。

〔堆積土〕溝内堆積上は2層にわかれる。第1層は中央部から南側に、第2層は溝全体に堆積している。自然流入土である。

〔幅・深さ〕溝の上端幅60cm～70cm・下端幅40cm～50cm・深さは10cm～20cmである。



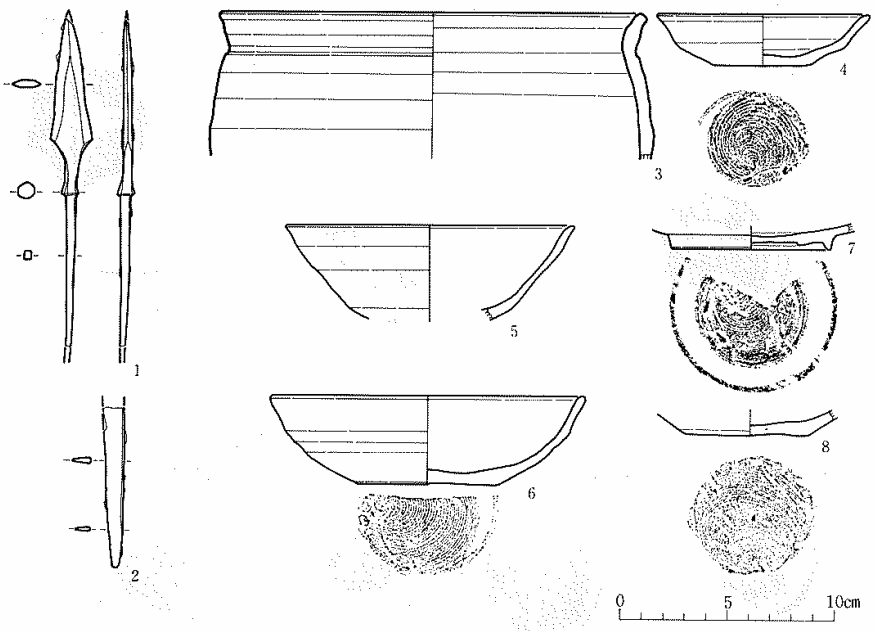
遺 物 観 察 表

単位：mm

No	器 形	層位	特 徴	口径	底径	器高	残存	分類	登 録
1	高台付坏	堆1	内外面体部：ヘラミガキ　内面体部・底部：黒色処理　底部：回転糸切り　高台：C類	157		70	½	Ⅳ	ミ1－1
2	坏	堆1	外面口縁・体部：ロクロナデ　内面体部：ヘラミガキ・黒色処理	(154)			¼		ミ1－13
3	高台付坏	堆1	外面高台・底部：ロクロナデ　内面底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　高台：C類						ミ1－4
4	高台付坏	堆2	外面体部高台：ヘラミガキ　内面体部：ヘラミガキ　体部・底部：黒色処理　底部：回転糸切り・ロクロナデ　高台：C類						ミ4－3
5	小 皿	堆1	内外面口縁・体部：ロクロナデ					Ⅱ	ミ1－12
6	高台付坏	堆1	内外面体部・高台・底部：ロクロナデ　高台：A類						ミ1－7
7	高台付坏	堆1	内外面体部・高台：ロクロナデ　底部：回転糸切り・ロクロナデ　高台：C類						ミ1－3
8	高台付坏	堆1・2	内外面高台：ロクロナデ　底部：回転糸切り・ロクロナデ　高台：B類						ミ1－8
9	高台付坏	堆1	内外面体部・高台：ロクロナデ　底部：回転糸切り　高台：D類						ミ1－6
10	平 瓦	堆1	凸面：縄叩き　凹面：布目						ミ1－15
11	平 瓦	堆1	凸面：ヘラケズリ　凹面：布目・桶枠痕？						ミ1－16

＊ 1～3・5～11第1号溝　4第4号溝　1～4土師器　5～9赤焼土器　10・11瓦

第9図　溝跡出土遺物（1）



遺物観察表

単位：mm

No	器形	層位	特徴	口径	底径	器高	残高	分類	登録
1	鉄鏃	堆1	現存全長 153						ミ2
2	刀子	堆1	現存全長75						ミ2
3	甕	堆1・2	内外面口縁～胴部：ロクロナデ	198			¼	Ⅱ	ミ4－7
4	小皿	堆2	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	97	45	24	¾	Ⅲ	ミ4－6
5	坏	堆1	内外面口縁・体部：ロクロナデ	(134)			¼	Ⅱ	ミ4－2
6	坏	堆1	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り	(146)	(61)	(42)	⅓	Ⅰ	ミ4－1
7	高台付坏	堆2	内外面体部・高台：ロクロナデ　底部：回転糸切り・ロクロナデ　高台：D類						ミ4－5
8	坏	堆1	外面体部：ロクロナデ　内面体部・底部：ヘラミガキ　底部：回転糸切り		58				ミ4－4

＊1・2第2号溝　3～8第4号溝　1・2鉄製品　3・8土師器　4～7赤焼土器

第10図　溝跡出土遺物（2）

〔底面・壁〕底面は皿状で、壁は緩かに立ちあがる。断面形は「U」字状である。

〔出土遺物〕（第10図）出土遺物には土師器・須恵器・赤焼土器がある。土師器には坏（8）・甕（3）・高台付坏（第9図4）があり、赤焼土器には小皿（4）・坏（5・6）・高台付坏（7）がある。この他に小破片のため図示できないが須恵器坏・甕がある。

第5号溝跡

〔方向〕溝の方向はN－90°－Wで、調査区外（西）にのびる。

〔幅・深さ〕溝の上端幅は40cm・下端幅は40cm・深さは7cmである。

〔底面・壁〕底面は皿状で、壁は緩かに立ちあがる。断面形は「U」字状である。

〔出土遺物〕土師器甕・須恵器坏の破片が各1点ある。

第6号溝跡

〔重複〕第7号溝跡に切られている。

〔方向〕溝の方向はW－60°－S～W－20°－Nで、緩かな弧を描き調査区外（東西）にのびる。

〔堆積土〕溝内堆積土は2層にわかれる。第1層は溝中央部を中心に、第2層は溝全体にそれぞれ堆積している。自然流入土である。

〔幅・深さ〕溝の上端幅は45cm～130cm・下端幅は20cm～50cm・深さ15cm～50cmである。

〔底面・壁〕溝底面は皿状で、壁は底面からやや急に立ちあがる。断面形は「U」字状である。

〔出土遺物〕なし。

第7号溝跡

〔重複〕第6号溝跡を切っている。

〔方向〕溝の方向はN－35°－Wであり、さらに調査区外（南北）にのびる。

〔幅・深さ〕溝の上端幅は25cm～30cm・下端幅は5cm～10cm・深さは5cmである。

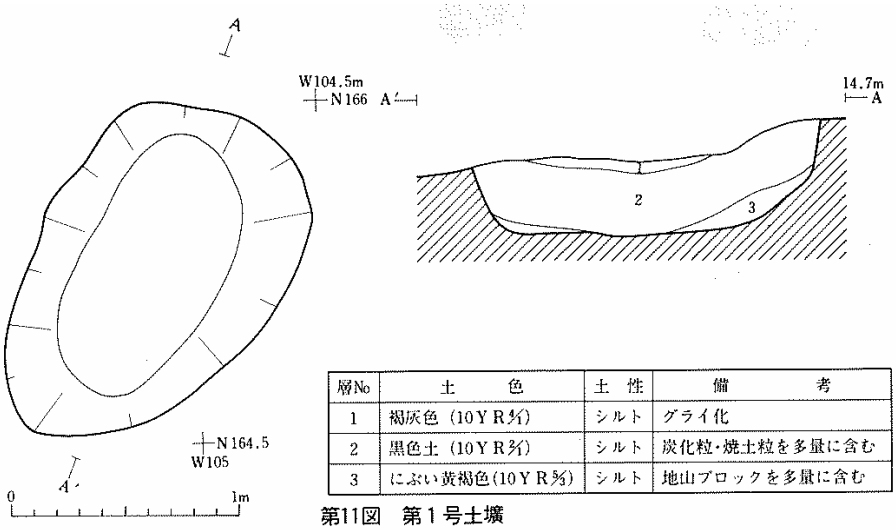
〔底面・壁〕溝の底面は皿状で、壁の立ちあがりは急である。

〔出土遺物〕なし。

(5)　土　壙

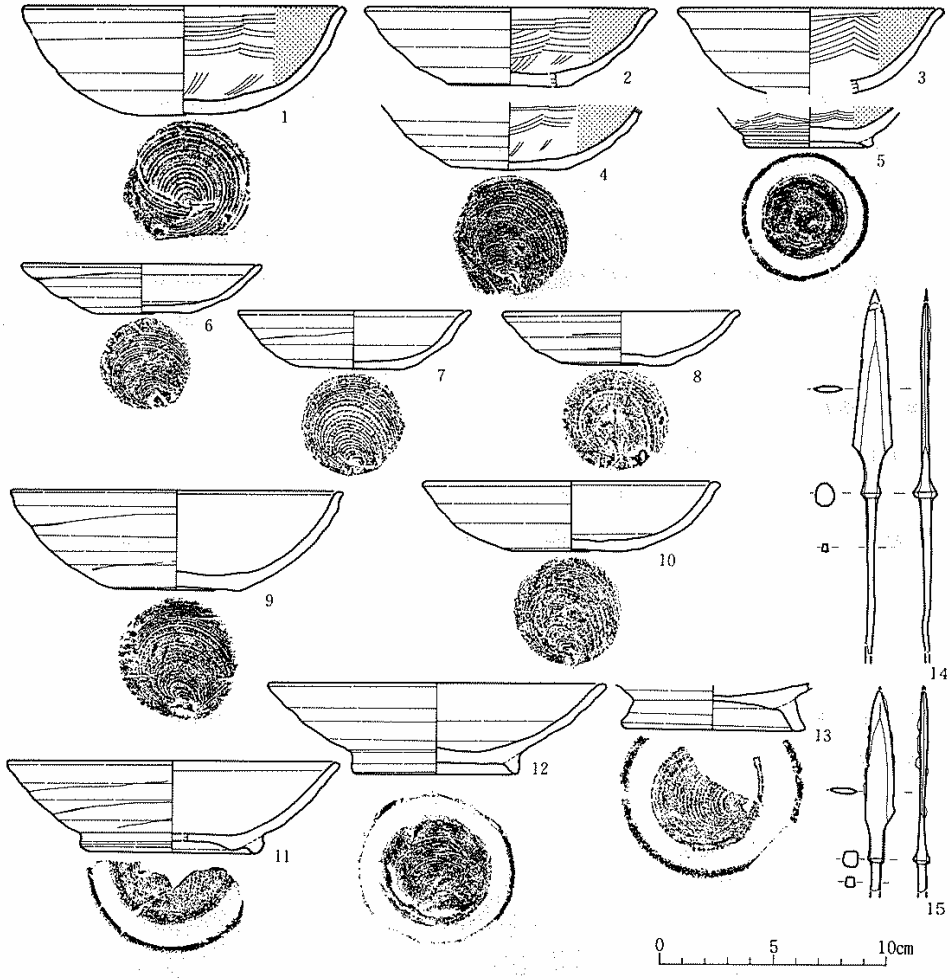
第1号土壙（第11図）

〔平面形・規模〕上端は長径165m・短径110cmの卵形を、下端は長径120cm・短径60cmの楕円形を呈する。深さは55cmである。



層No	土　色	土　性	備　考
1	褐灰色（10YR4/1）	シルト	グライ化
2	黒色土（10YR2/1）	シルト	炭化粒・焼土粒を多量に含む
3	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロックを多量に含む

第11図　第１号土壙



遺物観察表

単位：mm

No	器形	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	分類	登録
1	坏	堆3上面	外面口縁・体部：ロクロナデ　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り	141	55	48	½	Ⅳ	土1－10a
2	坏	堆3上面	外面口縁・体部：ロクロナデ　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り	(128)	(54)	(35)	¼	Ⅲ	土1－15
3	坏	堆3上面	外面口縁・体部：ロクロナデ　内面体部：ヘラミガキ・黒色処理	(116)					土1－14
4	坏	堆3上面	外面体部：ロクロナデ　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り		52				土1－18
5	高台付坏	堆3上面	内外面体部：ヘラミガキ　内面体部・底部：黒色処理　高台・底部：ロクロナデ　高台：C類						土1－16
6	小皿	堆3上面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	106	42	22	½	Ⅱ	土1－21
7	小皿	堆3上面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	103	45	26	⅔	Ⅱ	土1－22
8	小皿	堆3上面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	104	48	24	⅚	Ⅱ	土1－20
9	坏	堆3上面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	(146)	54	44	⅔	Ⅰ	土1－9
10	坏	堆3上面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り	(131)	49	31	½	Ⅰ	土1－13
11	高台付坏	堆3上面	内外面口縁・体部・高台・底部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　高台：C類	(146)		40	½	Ⅰ	土1－12
12	高台付坏	堆3上面	内外面口縁・体部・高台：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り・ロクロナデ　高台：D類	(149)		40	½	Ⅰ	土1－11
13	高台付坏	堆3上面	内外面体部・高台：ロクロナデ　底部：回転糸切り　高台：B類						土1－17
14		堆1	鉄鏃　現存全長155						土1
15		堆1	鉄鏃　現存全長88						土1

＊ 1～5土師器　6～13赤焼土器　14・15鉄製品

第12図　第1号土壙出土遺物

〔堆積土〕土壙内堆積土は3層にわかれる。第1層は土壙中央部に薄く、第2層は土壙全体に厚く、第3層は壁際を中心に薄く堆積している。なお、1層は現水田用水路の底面真下にあたるためグライ化したものと考えられる。

〔底面・壁〕地山を壁・底面としている。底面は中央でわずかに凹む。壁と底面の境は丸みをもち、壁の立ちあがりは急である。

〔出土遺物〕（第12図）土師器・須恵器・赤焼土器・鉄製品があり、主として第3層上面から一括廃棄された状態で出土している。土師器には坏（1～4）・高台付坏（5）・赤焼土器には小皿（6～8）・坏（9・10）・高台付坏（11～13）がある。この他に小破片のために図示できないが土師器甕、須恵器坏・甕がある。なお、第4号土壙出土土器と接合する土器もある（第21図）。鉄製品には鉄鏃（14・15）がある。

第2号土壙（第8図）

〔重複〕土壙北側で第1号溝と接するが、重複関係は不明である。

〔平面形・規模〕土壙の上端・下端とも平面形は略卵形である。規模は上端長径4m・短径2m、下端長径3.9m・短径1.7mである。深さは35cmである。

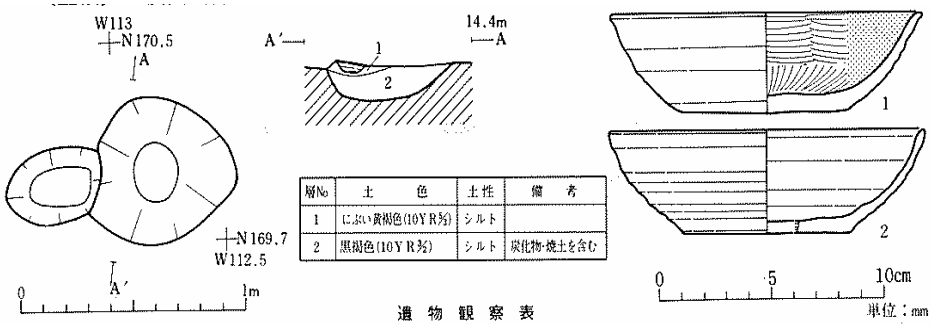
〔堆積土〕土壙内堆積土は2層にわかれる。第1層は土壙中央部から西側に、第2層は土壙全体に堆積している。

〔底面・壁〕地山を壁・底面としている。底面は西側で緩かな段になっている。底面と壁の境は丸みをもち、壁は急に立ちあがる。

〔出土遺物〕遺物は第2層から土師器坏・甕、須恵器坏が少量出土している。いずれも小破片のため図示できない。

第3号土壙（第13図）

〔重複〕土壙西側部分ピットにより切られている。



層No	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・焼土を含む

遺物観察表

No	器形	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	分類	登録
1	坏	堆1	外面口縁・体部：ロクロナデ　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り	137	74	41	3/4	I	土3
2	坏	堆1・2	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り	(140)	(74)	(42)	3/4		土3

＊ 1土師器　2須恵器

第13図　第3号土壙

〔平面形・規模〕土壙の上端・下端とも平面形は円形を呈する。上端は直径60cm・下端20cmである。
深さは23cmである。

〔堆積土〕土壙内堆積土は2層にわかれる。第1層は土壙中央部から南側に薄く、第2層は土壙全体に厚く堆積している。

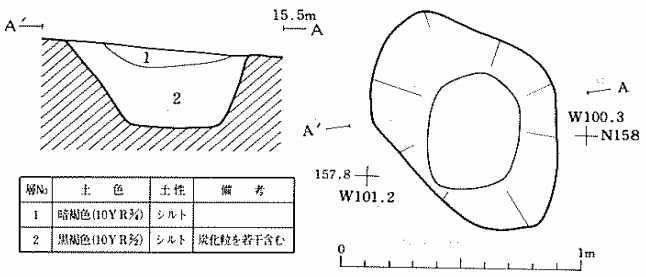
〔底面・壁〕地山を壁・底面としている。底面は皿状を呈し、壁は緩かに立ち上がる。

〔出土遺物〕出土遺物には土師器（1）・甕、須恵器坏（2）がある。土師器甕は小破片のため図示できない。

第4号土壙（第14図）

〔平面形・規模〕土壙の上端・下端とも平面形は楕円形を呈する。規模は上端長径115cm・短径75cm、下端長径55cm・短径40cmである。

〔堆積土〕土壙内堆積土は2層にわかれる。第1層は土壙中央部に薄く、第2層は土壙全体に厚く堆積している。



層No	土　色	土性	備　考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
2	黒褐色(10YR3/3)	シルト	炭化粒を若干含む

第14図　第４号土壙

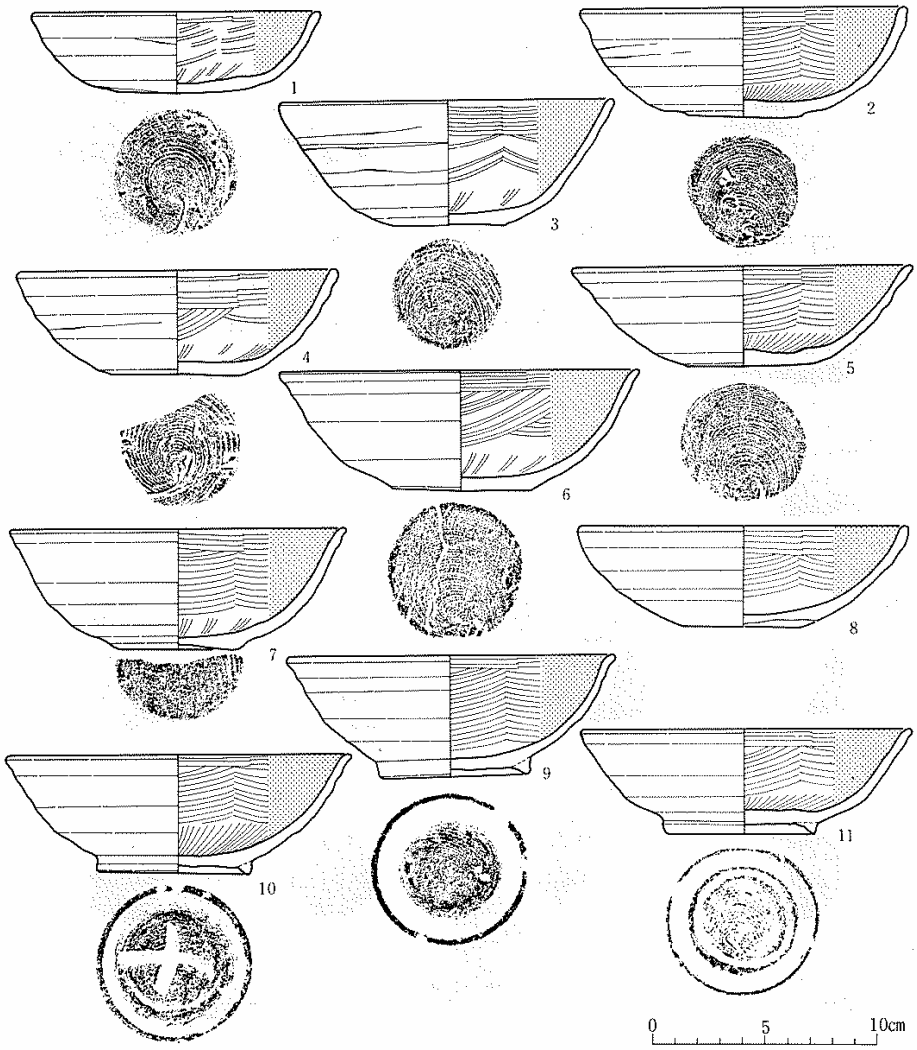
〔底面・壁〕地山を壁・底面としている。底面はほぼ平坦で、底面と壁の境は丸みをもっている。壁の立ちあがりは急である。

〔出土遺物〕（第15～20図）底面から多量の土師器・須恵器・赤焼土器が一括廃棄された状態で出土している。土師器には坏（第15図1～8）・高台付坏（第15図9～11・第16図1～4）・甕（第16図5）がある。

赤焼土器には小皿（第16図6～15・第17図・第18図1～10）高台付小皿（第18図11・12）・坏（第18図13～15・第19図1～8）・高台付坏（第19図10・第20図）・高台付小型坏（第19図9）がある。

この他に、小破片のため図示できないが、土師器甕、須恵器坏・甕がある。

なお、第1号土壙出土土器と接合する土器もある。土師器では高台付坏（第21図1）、赤焼土器では小皿（第21図2）・坏（第21図3～9）がそれである。



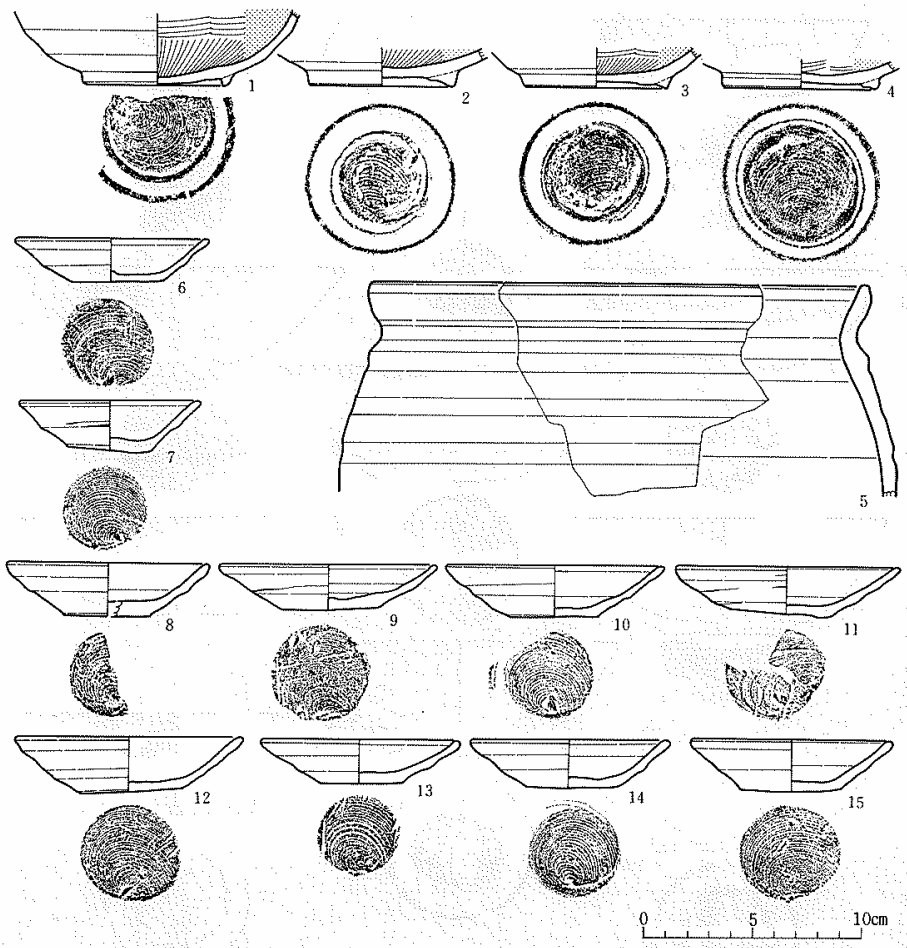
遺物観察表

単位：mm

No	器形	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	分類	登録
1	坏	底面	外面口縁・体部・ロクロナデ・巻上痕　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り	(127)	56	36	¼	Ⅲ	土４－７
2	坏	底面	外面口縁・体部：ロクロナデ・巻上痕　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り	144	49	48	¼	Ⅳ	土４－３
3	坏	底面	外面口縁・体部：ロクロナデ・巻上痕　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り	147	49	55	¼	Ⅳ	土４－２
4	坏	底面	外面口縁・体部：ロクロナデ・巻上痕　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り	(142)	57	46	½	Ⅳ	土４－９
5	坏	底面	外面口縁・体部：ロクロナデ　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り	150	55	44	¾	Ⅳ	土４－12
6	坏	底面	外面口縁・体部：ロクロナデ　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り	157	61	53	⅝	Ⅳ	土４－４
7	坏	底面	外面口縁・体部：ロクロナデ　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り	(148)	(58)	53	⅗	Ⅳ	土４－14
8	坏	底面	外面口縁・体部：ロクロナデ　内面体部：ヘラミガキ　内面体部・底部：黒色処理	146				Ⅳ	土４－５
9	高台付坏	底面	外面口縁・体部・高台：ロクロナデ　内面体部：ヘラミガキ　体部・底部：黒色処理　底部：回転糸切り　高台：D類	144		54	⅝	Ⅱ	土４－15
10	高台付坏	底面	外面口縁・体部・高台：ロクロナデ　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り　高台：C類	152		57	⅗	Ⅱ	土４－16
11	高台付坏	底面	外面口縁・体部・高台：ロクロナデ　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り　高台：D類	(146)		46	¼	Ⅲ	土４－８

＊　1～11土師器

第15図　第４号土壙出土遺物（１）



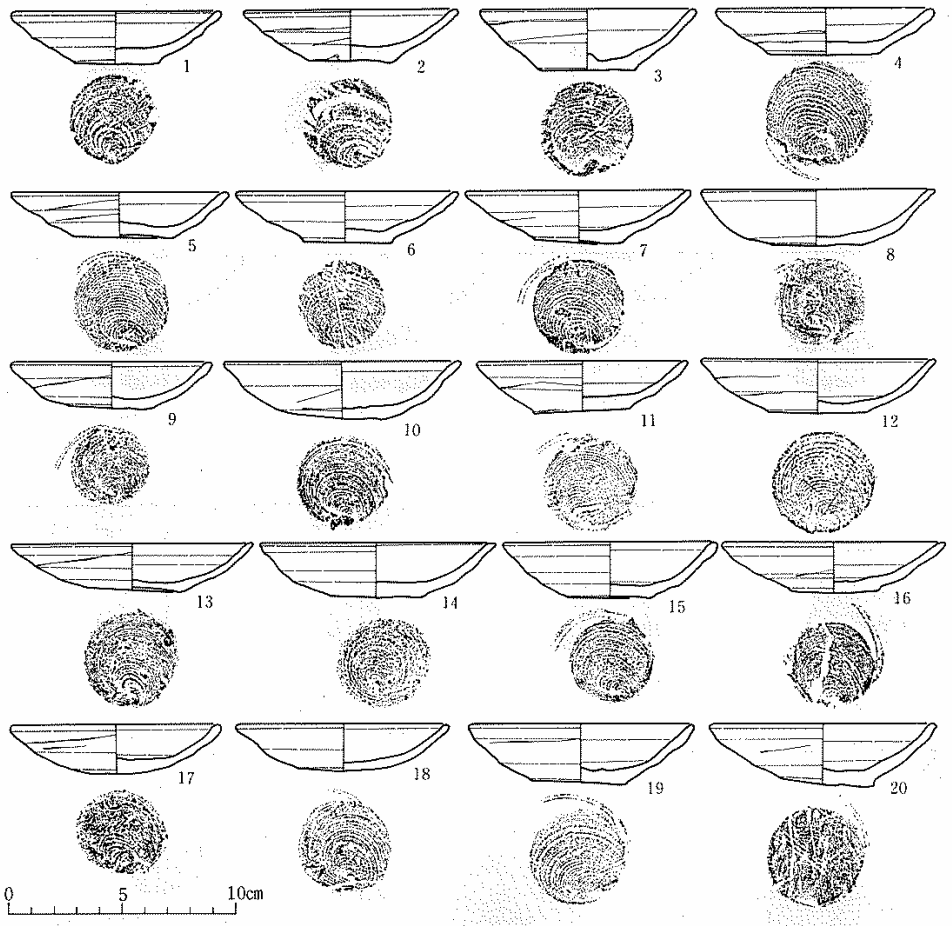
遺物観察表

単位：mm

No	器形	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	分類	登録
1	高台付坏	底面	外面体部・高台：ロクロナデ 内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理 底部：回転糸切り・ロクロナデ 高台：C類						土4－17
2	高台付坏	底面	外面体部・高台：ロクロナデ 内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理 底部：回転糸切り 高台：D類						土4－19
3	高台付坏	底面	外面体部・高台：ロクロナデ 内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理 底部：回転糸切り 高台：D類						土4－20
4	高台付坏	底面	外面体部・高台：ロクロナデ 内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理 底部：回転糸切り 高台：C類						土4－18
5	甕	底面	内外面口縁～胴部：ロクロナデ	(228)					土4－30
6	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り	89	43	20	1/4	I	土4－63
7	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ 外面体部：巻上げ痕 底部：回転糸切り	83	39	23	1/4	I	土4－62
8	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り	(93)	(38)	25	1/3	I	土4－54
9	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ 外面体部：巻上げ痕 底部：回転糸切り	100	45	21	5/6	I	土4－45
10	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り（離し）	100	41	24	1/2	I	土4－55
11	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ 外面体部：巻上げ痕 底部：回転糸切り	101	46	22	2/3	I	土4－40
12	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り	104	46	25	1/4	I	土4－73
13	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り	91	38	20	3/8	I	土4－52
14	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り	91	42	22	1/4	I	土4－67
15	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り	92	46	24	1/4	I	土4－72

＊ 1～5 土師器　6～15赤焼土器

第16図　第4号土壙出土遺物（2）



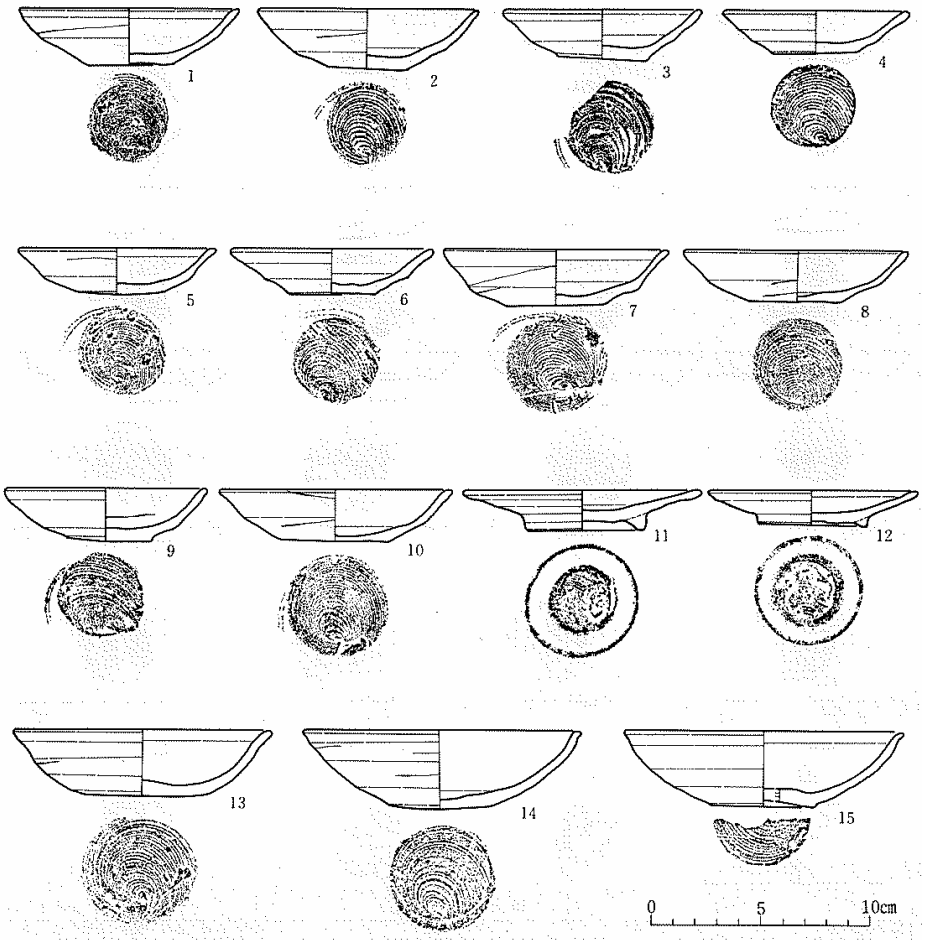
遺物観察表

単位：mm

No	器形	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	分類	登録
1	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り	92	38	24	½	Ⅰ	土４－66
2	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	93	40	23	½	Ⅰ	土４－69
3	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	94	43	27	½	Ⅰ	土４－83
4	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り（離し）	95	47	20	½	Ⅰ	土４－74
5	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り（離し）	95	42	20	½	Ⅰ	土４－76
6	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	97	39	22	½	Ⅰ	土４－80
7	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り（離し）	97	41	22	½	Ⅰ	土４－78
8	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り（離し）	102	40	25	⅔	Ⅰ	土４－44
9	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り（離し）	88	36	20	½	Ⅱ	土４－64
10	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	104	39	25	¾	Ⅱ	土４－48
11	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り（離し）	92	43	22	½	Ⅱ	土４－75
12	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	(103)	33	24	½	Ⅱ	土４－47
13	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	105	41	21	¾	Ⅱ	土４－50
14	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り	103	39	24	½	Ⅱ	土４－41
15	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り（離し）	95	37	24	½	Ⅱ	土４－79
16	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り（離し）	98	37	22	¾	Ⅱ	土４－61
17	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外部体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	92	36	21	½	Ⅱ	土４－65
18	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り（離し）	93	40	21	⅔	Ⅱ	土４－60
19	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り（離し）	98	42	25	½	Ⅱ	土４－82
20	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り（離し）	99	45	26	½	Ⅱ	土４－43

＊ １～20赤焼土器

第17図　第４号土壙出土遺物（３）



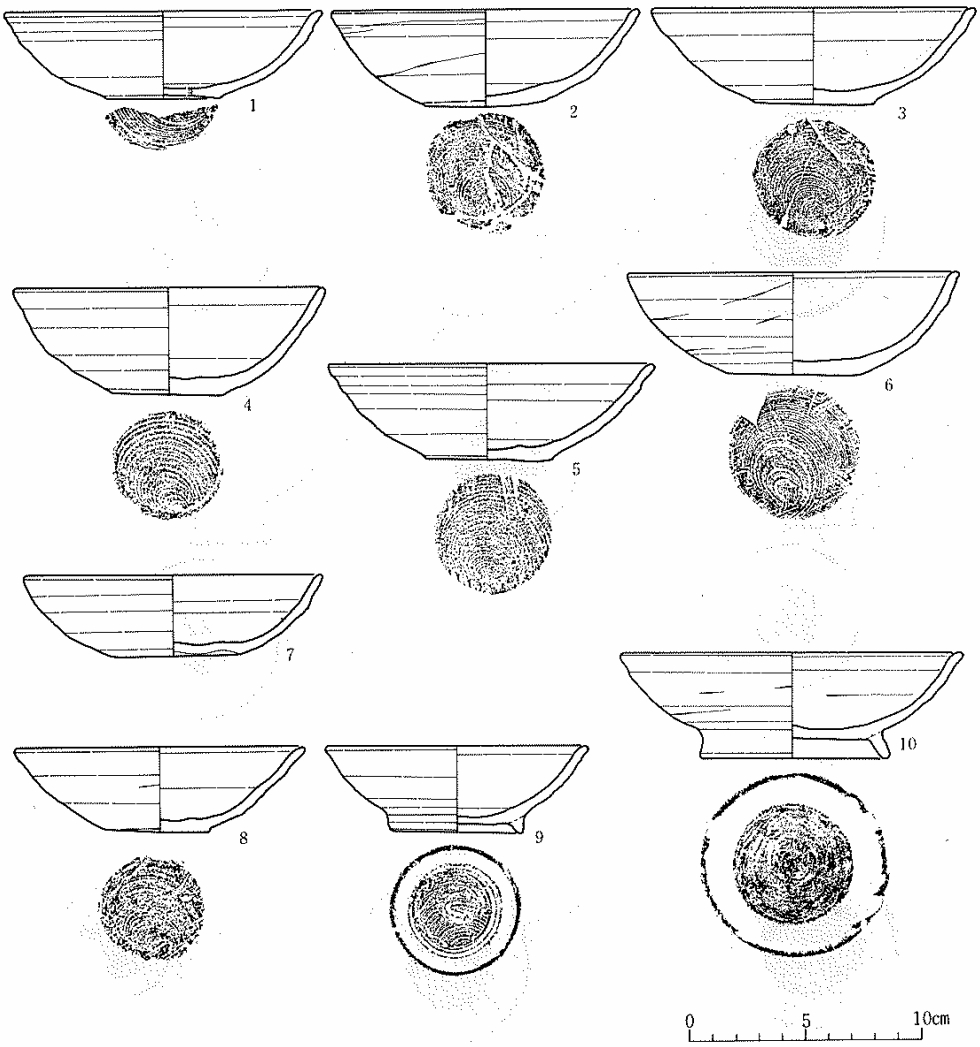
遺物観察表

単位：mm

No	器形	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	分類	登録
1	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り（離し）	99	37	26	½	Ⅱ	土４－77
2	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り（離し）	101	36	27	½	Ⅱ	土４－81
3	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り	90	40	22	½	Ⅰ	土４－53
4	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り	84	38	19	½	Ⅲ	土４－71
5	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り（離し）	90	40	21	½	Ⅲ	土４－68
6	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り（離し）	92	40	21	⅔	Ⅲ	土４－57
7	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り（離し）	102	44	26	½	Ⅲ	土４－46
8	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	102	42	23	½	Ⅲ	土４－59
9	小皿	底面	内外面口縁・体部・ロクロナデ　内面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り（離し）	92	38	24	½	Ⅲ	土４－70
10	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り（離し）	105	47	24	½	Ⅲ	土４－42
11	高台付小皿	底面	内外面口縁・体部・高台：ロクロナデ　底部：回転糸切り　高台：D類	108		18	⅔		土４－85
12	高台付小皿	底面	内外面口縁・体部・高台：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り・ロクロナデ　高台：D類	94		16	½		土４－84
13	坏	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	117	49	30	¾	Ⅰ	土４－32
14	坏	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	126	47	36	½	Ⅰ	土４－34
15	坏	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り	(126)	(47)	34	⅓	Ⅰ	土４－33

＊　1～15赤焼土器

第18図　第４号土壙出土遺物（４）



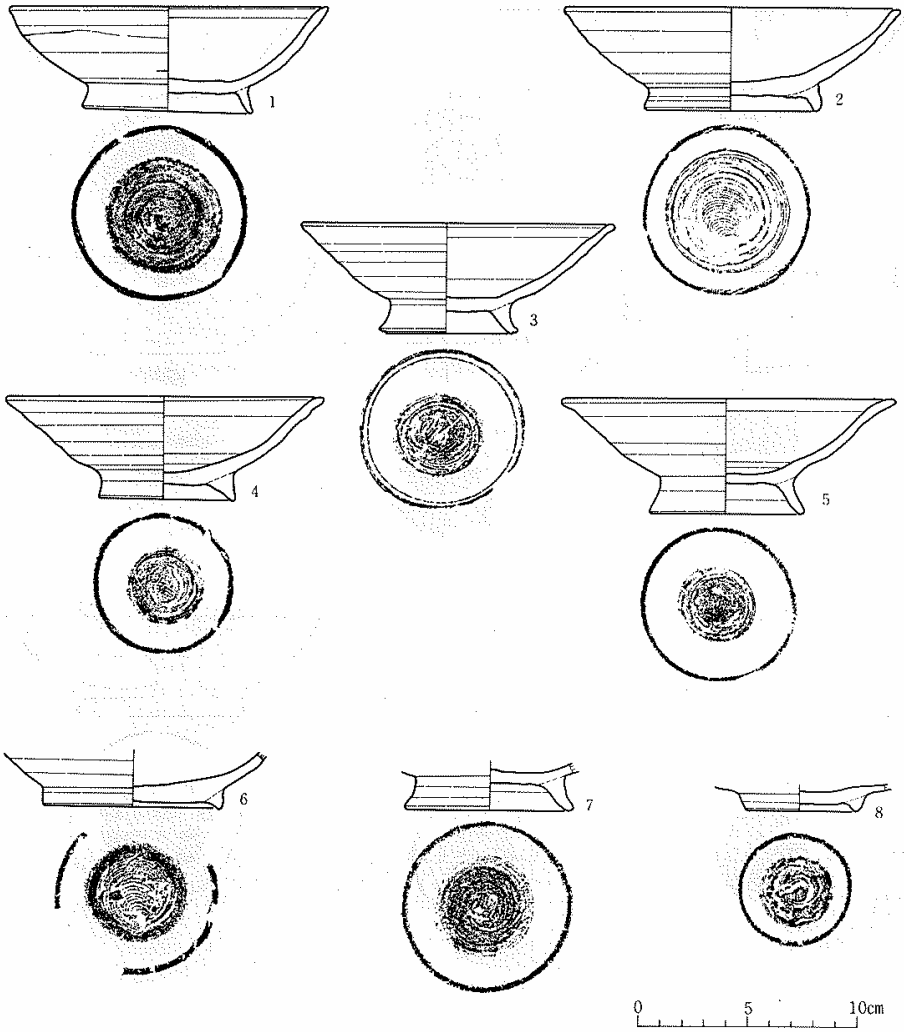
遺物観察表

単位：mm

No	器形	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	分類	登録
1	坏	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り	(136)	(48)	(38)	1/3	Ⅰ	土4－39
2	坏	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	131	51	42	5/6	Ⅰ	土4－31
3	坏	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	138	51	42	3/4	Ⅰ	土4－38
4	坏	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り	133	47	46	3/4	Ⅰ	土4－36
5	坏	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り	139	54	41	1/4	Ⅰ	土4－37
6	坏	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	(142)	57	45	1/2	Ⅰ	土4－8a
7	坏	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り	128	52	35	1/4	Ⅰ	土4－1
8	坏	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り	124	45	36	1/4	Ⅱ	土4－35
9	高台付坏	底面	内外面口縁・体部・高台：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	112		38	1/4		土4－24
10	高台付坏	底面	内外面口縁・体部・高台・底部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　高台：B類	146		46	1/4	Ⅰ	土4－25

第19図　第4号土壙出土遺物（5）

＊ 1～10赤焼土器



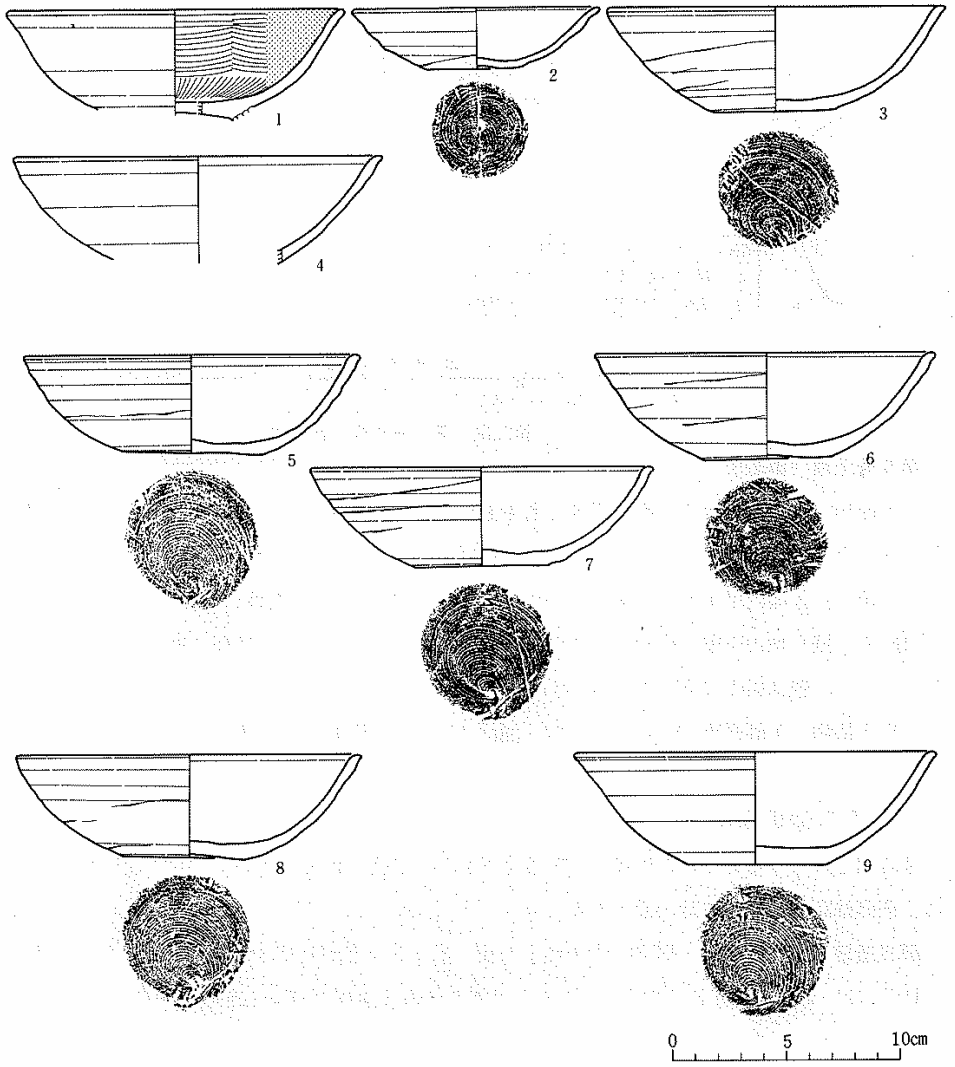
遺物観察表

単位：mm

No	器形	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	分類	登録
1	高台付坏	底面	内外面口縁・体部・高台・底部：ロクロナデ 外面体部:巻上げ痕 高台：B類	145		48	¼	Ⅰ	土4－26
2	高台付坏	底面	内外面口縁・体部・高台：ロクロナデ 底部：回転糸切り 高台：C類	151		47	⅕	Ⅰ	土4－7a
3	高台付坏	底面	内外面口縁・体部・高台・底部：ロクロナデ 底部：糸切り 高台：B類	142		51	¼	Ⅱ	土4－23
4	高台付坏	底面	内外面口縁・体部・高台・底部：ロクロナデ 底部：回転糸切り 高台：D類	145		47	¼	Ⅱ	土4－22
5	高台付坏	底面	内外面口縁・体部・高台・底部：ロクロナデ 底部：回転糸切り 高台：B類	151		53	¼	Ⅱ	土4－21
6	高台付坏	底面	内外面体部・高台・底部：ロクロナデ 底部：回転糸切り 高台：C類						土4－27
7	高台付坏	底面	内外面高台・底部：ロクロナデ 底部回転糸切り 高台：B類						土4－28
8	高台付坏	底面	内外面体部・高台・底部：ロクロナデ 高台：C類						土4－29

第20図　第4号土壙出土遺物（6）

＊ 1～8 赤焼土器

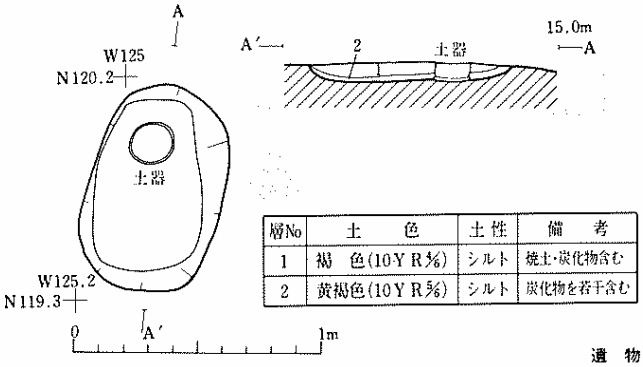


遺物観察表

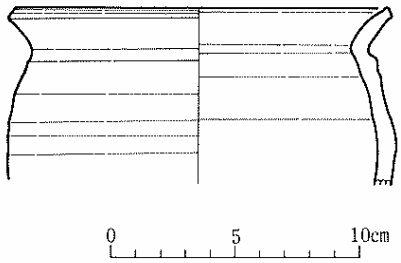
単位：mm

No	器形	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	分類	登録
1	高台付坏	底面	外面口縁・体部・底部：ロクロナデ　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理	148			½	Ⅱ	土4－11
2	小皿	底面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	107	41	27	⅚	Ⅱ	土4－49
3	坏	堆3上面	内外面口縁・体部・ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	147	52	46	⅚	Ⅰ	土1－4
4	坏	堆3上面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕	162	54		⅓		土1－10
5	坏	堆3上面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	147	59	43	⅓	Ⅰ	土1－1
6	坏	堆3上面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	148	55	47	⅔	Ⅰ	土1－3
7	坏	堆3上面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	150	58	44	⅚	Ⅰ	土1－6
8	坏	堆3上面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り	151	55	45	½	Ⅰ	土1－2
9	坏	堆3上面	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：回転糸切り	158	58	49			土1－5

第21図　第1・4号土壙出土接合遺物　　＊ 1土師器　2～9赤焼土器



層No	土　色	土性	備　考
1	褐　色(10YR⅝)	シルト	焼土・炭化物含む
2	黄褐色(10YR⅝)	シルト	炭化物を若干含む



遺物観察表　　単位：mm

No	器形	層位	特　徴	口径	底径	器高	残存	分類	登録
1	小形甕	底面	内外面口縁～胴部：ロクロナデ	154					土5

第22図　第５号土壙・出土遺物　　＊１土師器

第5号土壙（第22図）

〔平面形・規模〕土壙の上端・下端とも平面形は楕円形を呈する。規模は上端長径85cm・短径55cm、下端長径65cm・短径45cmである。深さは6cmである。

〔堆積土〕土壙内堆積土は2層にわかれる。第1・2層とも土壙全体に堆積している。

〔底面・壁〕地山を壁・底面としている。底面はほぼ平坦である。底面と壁との境は丸みをもっている。壁は緩かに立ちあがる。

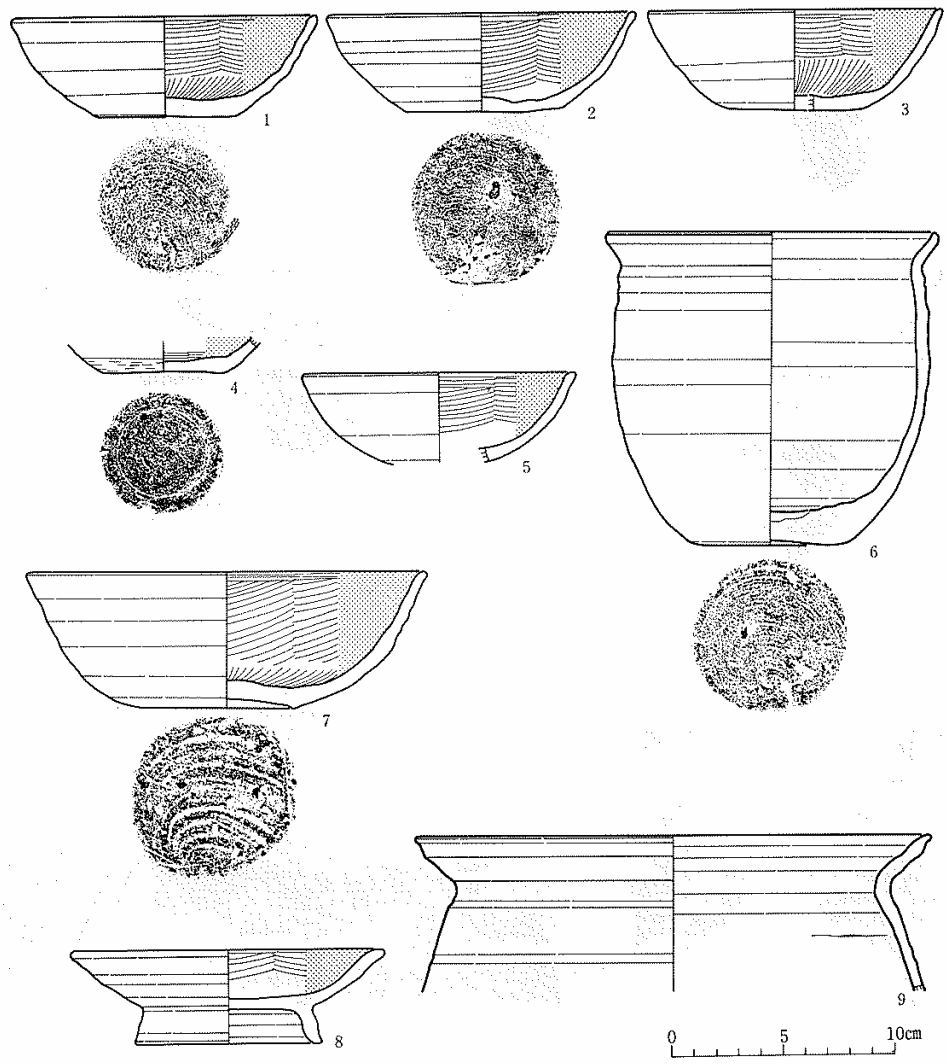
〔出土遺物〕土師器甕（1）1点である。倒位で底面やや北寄りから出土している。

3．その他の遺構

確認調査により発見された鹿島遺跡・竹之内遺跡の遺構の概要について、以下記述する。なお、遺構確認面はすべて地山面である。

鹿島遺跡　竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壙・ピットなどが発見された。竪穴住居跡はＤＢ～ＤＥ－121・119グリッドで3軒、またその可能性のある遺構がＤＩ－129・ＤＨ－134グリッドで3基発見された。掘立柱建物跡はＤＡ－115グリッドで1棟発見され、東側柱列3間、南側および北側柱列を各1間検出された。土壙・ピットはＣＳ～ＤＥ－109～115およびＤＦ～ＤＬ－134～138グリッドで多数発見された。

竹之内遺跡　竪穴住居跡・ピットなどが発見された。竪穴住居跡はＡＳ－24グリッドで1軒発見された。火災住居と考えられる。また竪穴住居跡の可能性のある遺構がＡＳ～ＢＡ－22グリッドで1基発見された。ピットはＡＳ－24～26およびＢＡ－27・28グリッドで多数発見され、炭化物・焼土を含むものが多い。ＢＡ－28グリッドで発見されたピットは直径約30cmの円形で深さ約30cmを測り、その中に土師器甕（第23図9）が倒位に埋設されていた。堆積土中には炭化物が多く含まれていた。



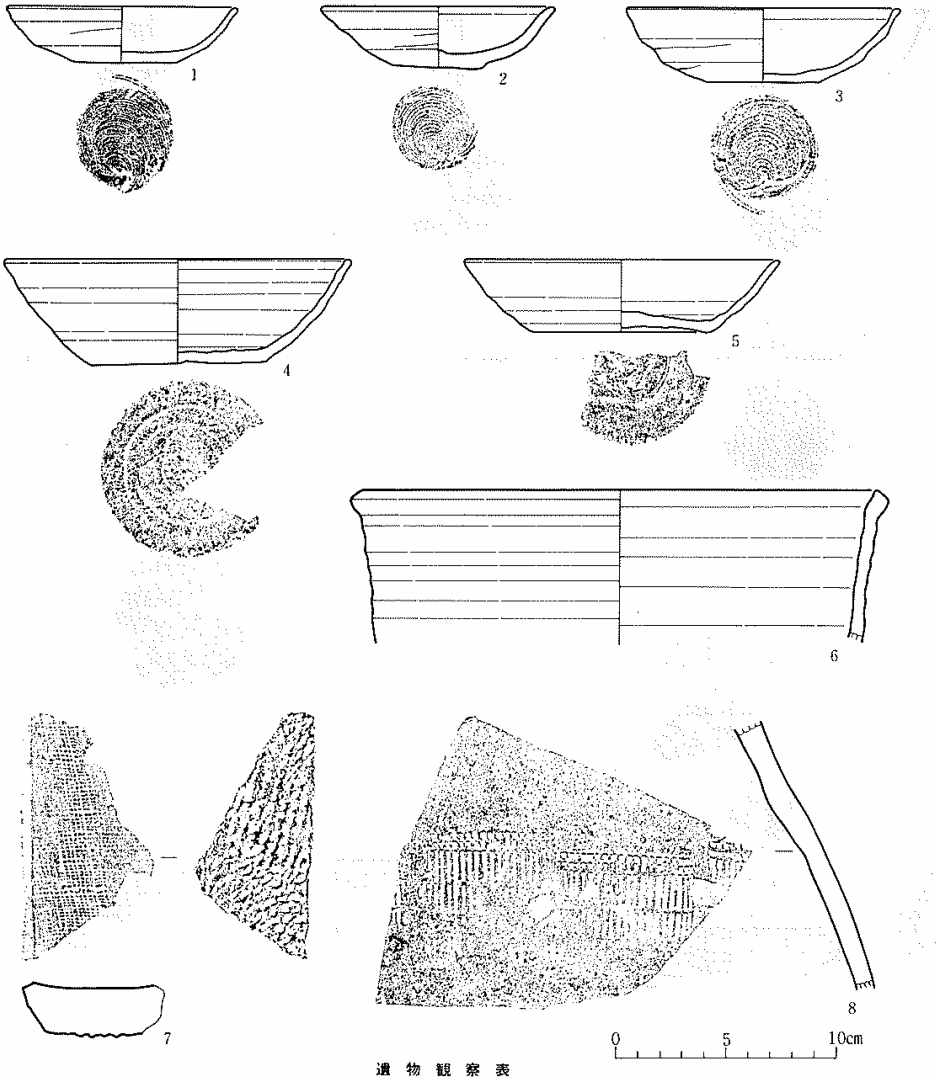
遺物観察表

単位：mm

No	器形	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	分類	登録
1	坏	カマド	外面口縁・体部：ロクロナデ　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り	135	62	45	5/6	Ⅰ	DB119住
2	坏	カマド	外面口縁・体部：ロクロナデ　内面体部：ヘラミガキ　体部・底部：黒色処理　底部：回転糸切り	137	70	44	3/4	Ⅰ	DB119住
3	坏	堆1	外面口縁・体部：ロクロナデ　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り	132	(60)	(45)	1/2	Ⅰ	DB119住
4	坏	堆1	外面体部：ロクロナデ・回転ヘラケズリ　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転ヘラケズリ		56				DC119住
5	坏	基1	外面口縁部・体部：ロクロナデ　内面体部：ヘラミガキ・黒色処理	122			1/4		DP118
6	小形甕	カマド	内外面口縁～胴部：ロクロナデ　底部：回転糸切り	(146)	70	140	1/3		DC119住
7	坏	堆1	外面口縁部・体部：ロクロナデ　内面体部・底部：放射状ヘラミガキ・黒色処理　底部：回転糸切り	178	71	61	1/3	Ⅱ	DO111住
8	高台付坏	堆1	外面口縁部・体部・高台・底部：ロクロナデ　内面体部：ヘラミガキ　体部・底部：黒色処理　高台：B類	(140)		(42)	1/3	Ⅲ	DO111住
9	甕	底面	内外面口縁～胴部：ロクロナデ　直径30cm深さ30cm円形ピットに倒置埋設　竹之内遺跡	230				Ⅰ	BA28

第23図　各区出土遺物（1）

＊ 1～9土師器



遺物観察表

No	器形	層位	特徴	口径	底径	器高	残存	分類	登録
1	小皿	基1	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り(離し)	104	47	25	¾	Ⅱ	DF117
2	小皿	基1	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り(離し)	104	38	28	¾	Ⅱ	Pit 1
3	坏	基1	内外面口縁・体部：ロクロナデ　外面体部：巻上げ痕　底部：回転糸切り(離し)	(123)	48	34	½	Ⅰ	DO118
4	坏	基1	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：ヘラキリ	156	79	47	⅓		DD115住
5	坏	基1	内外面口縁・体部：ロクロナデ　底部：ヘラキリ	(142)	(78)	33	⅓		DE121
6	甑?	基1	内外面口縁～胴部：ロクロナデ	(243)			⅓		表採
7	平瓦	カマド	凸面：縄叩き　凹面：布目　側縁：3面ヘラケズリ						DB119住
8	甕	基1	外面：簾状押印						CT73

＊ 1～3赤焼土器　4・5須恵器　6土師器　7瓦　8中世陶器

第24図　各区出土遺物(2)

Ⅳ．出土遺物の検討

1．土器の分類

出土した土器には土師器・須恵器・赤焼土器がある。以下、種別・器種ごとに分類する。

土師器

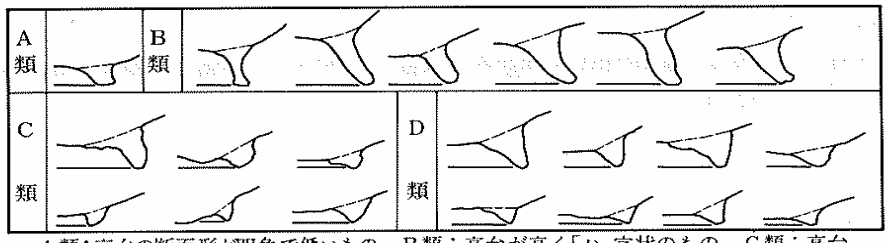
すべて製作にロクロを使用している。器種としては坏・高台付坏・甕・小形甕・甑がある。

坏　体部は内弯気味に外傾する。内面ヘラミガキ・黒色処理を行っている。ヘラミガキの方向は底部は放射状・体部は横または斜め方向・口縁部は横方向である。底部の切離しは回転糸切りである。法量・口縁部形態・調整技法により分類する。なお、口縁部の形態は外反するものをａとし、しないものをｂとする。

Ⅰ類：7点ある。口径13㎝～14㎝で口径：底径は1：0.45～0.55で0.46前後のものが多い。口縁部の形態にはａ・ｂがある。底部は回転糸切り無調整のものと周縁手持ヘラケズりのものとがある。Ⅱ類～Ⅳ類の底部は回転糸切り無調整である。Ⅱ類：1点ある。口径17.8㎝と大ぶりで口径：底径は1：0.40である。口縁部の形態はｂである。Ⅲ類：2点ある。口径12.5㎝～13㎝で口径：底径は1：0.42～0.44である。器高が低く、皿状のものである。口縁部形態にはａ・ｂがある。Ⅳ類：口径が14㎝～16㎝で口径：底径は1：0.33～0.41である。口縁部の形態にはａ・ｂがある。

高台寸坏　内面ヘラミガキ・黒色処理を行っている。高台は付高台である。体部および口縁部の形態・高台の形態（第1表）・調整技法により分類する。

Ⅰ類：1点ある。体部が直線的に外傾し、口縁部が外反する。底部切離し及び調整技法は不明である。底部外縁に高台を付ける。高台形態はB類である。Ⅱ類：2点ある。体部が内弯気味に外傾し、口縁部が軽く外反する。底部の切離しは回転糸切りである。底部周縁及び高台内外面にロクロナデを施す。体部下端に高台を付ける。高台形態はC・D類である。Ⅲ類：1点ある。体部下半で内側に屈曲する。体部上半は直線的に外傾しそのまま口縁部に至る。底部の切離しは回転糸切りである。底部周縁及び高台内外面にロクロナデを施す。底部外縁に高台を付ける。



A類：高台の断面形が四角で低いもの　B類：高台が高く「ハ」字状のもの　C類：高台外面に稜をもつもの　D類：高台の断面形が三角形のもの

第１表　高台の形態分類（土師器・赤焼土器）

高台形態はD類である。Ⅳ類：1点ある。埦状のものである。体部は中央部までは内弯気味に外傾するが、上半部は直立気味である。口縁部は軽く外反する。体部外面中央部にヨコヘラミガキを施す。底部の切離しは回転糸切りである。底部周縁及び高台内外面にロクロナデを施す。体部下端に高台を付ける。高台形態はC類である。Ⅴ類：1点ある。皿状のものである。体部が直線的に外傾し、口縁部が軽く外反する。底部は全面ロクロナデを施す。底部と体部の境に高台を付ける。高台形態はB類である。

甕　口縁部の形態により分類する。

Ⅰ類：3点ある。口縁部が「く」字状に外傾する。口縁端部の断面形が撥状を呈するもの（a）と肥厚せず丸くおさめるもの（b）がある。Ⅱ類：1点ある。口縁部が短かく外反が弱い。

小形甕　2点ある。胴部がやや丸味をもって立ちあがり、口縁部が外傾する。口縁端部が直立するものとしないものとがある。

甑　1点ある。胴部からわずかに外傾して口縁に至る。口縁端を平らに作る。胴部・口縁部の形態から甑の可能性がある。

須恵器

坏　5点ある。体部が直線的に外傾し、そのまま口縁に至る。底部が回転糸切り無調整のもの・ヘラキリ無調整のもの・全面手持ヘラケズリのものがある。

赤焼土器

小皿・高台付小皿・坏・高台付坏の器種がある。底部の切離し確認できるものはすべて回転糸切りである。小皿・坏はすべて回転糸切り無調整である。

小皿　口径8.3㎝～10.7㎝、器高1.9㎝～2.7㎝である。体部外面に右上りの巻上げ痕を留めるものが多い。約半数に底部糸切りの際、糸を抜いた痕跡が体部下端から中央に認められ、回転糸切りの中でも「離し糸切り」（小川：1979）によっていることが知られる。体部及び口縁部の形態により分類する。

Ⅰ類：17点ある。体部が直線的に外傾する。Ⅱ類：19点ある。体部が内弯気味に外傾する。Ⅲ類：10点ある。体部中央で屈曲する。Ⅰ類～Ⅲ類はさらに口縁部が外反するもの（a）と直線的もしくは内弯気味のもの（b）に細分できる。

高台付小皿　2点ある。底部周縁及び高台内外面にロクロナデを施す。体部下端に高台を付ける。高台形態はD類である。

坏　体部外面に右上りの接合痕を留めるものが約半数ある。体部・口縁部の形態により分類する。

Ⅰ類：21点ある。体部が内弯気味に外傾する。口縁部が外反するもの（a）としないもの（b）がある。Ⅱ類：2点ある。体部が直線的に外傾し、そのまま口縁に至る。

高台付坏　底部周縁または全面と高台内外面にロクロナデを施す。体部・口縁部の形態により分類する。

Ⅰ類：4点ある。体部が内弯気味に外傾する。口縁部が軽く外反するもの（ａ）と外反しないもの（ｂ）がある。体部下端に高台を付ける。高台形態はａがB類・ｂがC類である。Ⅱ類：体部が直線的に外傾し、口縁部が外反する。体部下端または体部と底部の境に高台を付ける。高台径はⅠ類に比して小さい。高台形態はB・D類である。

2．土器の共伴関係と編年的位置

出土した土師器はすべて製作にロクロを使用している。このような土師器は東北地方南部では表杉ノ入式（氏家：1957）とされており、平安時代に位置づけられている。後述するように、近年表杉ノ入式期の土器については編年的細分が試みられている。本遺跡の精査された遺構においても土器の形態的特徴・組成に顕著な相違が認められることから細分することが可能である。土器がまとまって出土した第1号住居跡と第1・4号土壙を中心に遺構の種類は異なるが比較検討を加えることにしたい。

(1) 共伴関係

第1号住居跡からは住居跡に伴う土器として土師器坏Ⅰ類（2点）・須恵器（1点）が出土している。一方、第1・4号土壙からは一括廃棄された状態で多量の土器が出土している。しかも第1号土壙の土器と第4号土壙の土器とは接合することから、すべて共伴関係にあるものと理解できる。第1・4号土壙から出土した土器には土師器・須恵器・赤焼土器がある。土師器には坏Ⅲ・Ⅳ類、高台付坏Ⅱ・Ⅲ類、甕（小破片・図なし）がある。須恵器には甕・坏（ともに小破片・図なし）が微量ある。赤焼土器には小皿Ⅰ～Ⅲ類、高台対小皿、坏Ⅰ・Ⅱ類、高台付坏Ⅰ・Ⅱ類がある。

つぎに第1号住居跡と第1・4号土壙の土器を比較すると、第1・4号土壙においては土師器坏Ⅰ類の出土がなく、また須恵器坏も小片が微量であることで相違が認められる。さらに第1・4号土壙自体における土器の特徴として、量的には図示した土器のうち赤焼土器約80%・土師器約20%であること、器種では図示した土器の約44%を赤焼土器小皿が占めることの2点をあげることができる。

第1号住居跡は土器組成において欠落している部分も多く、第1・4号土壙とは充分な比較はできなかったが、土器形態及び様相において相違があることが看取された。そこで第1号住跡と第1・4号土壙の土器群をそれぞれA群土器・B群土器とに分類し、つぎにA・B群土器の編年的位置を検討することにしたい。

(2) 編年的位置

表杉ノ入期の土器については、主として坏類の製作技法・形態などにより編年的細分が試み

られている（阿部義平：1968、小笠原：1976、白鳥：1980、丹羽・小野等・阿部：1981）。また宮城県内では県北部と県南部の土器様相の相違も示唆されている（森：1983、丹羽：1983）。県南の土器については集落遺跡の土師器坏を中心に器形・器面調整に注目して、つぎのような変遷が考えられている（丹羽：1983）。すなわち宮前遺跡第20号住居跡→青木遺跡第21号住居跡・台ノ山遺跡第8号住居跡→東山遺跡土器溜→家老内遺跡第2号住居跡・宮前遺跡第54号住居跡→安久東遺跡第2号住居跡である。この変遷の中で注目されることは土師器坏の口径に対する底径の比である。宮前遺跡第20号住居跡では口径：底径が1：0.6前後であるが、それ以降口径に対する底径の比は漸減し、安久東遺跡第2号住居跡では1：0.35前後になることである。

このような成果を踏まえてA・B群土器の編年的位置について考えることにしたい。

A群土器（第1号住居跡出土土器）

土師器坏はI類で2点（第3図1・2）ある。口径：底径は2が1：0.47、1が1：0.46である。2は椀状のもので体部の内弯が強い。1は体部の内弯が弱い。ここでは口径底径比が近似した値をとる東山遺跡（真山：1981）土器溜と家老内遺跡（真山：1981）第2号住居跡出土土師器坏と比較してみたい。2は体部の内弯が強いという点では家老内遺跡に共通する。1のように体部の内弯が弱い器形は東山遺跡に多くみられるものである。須恵器坏は1点（第3図5）ある。家老内遺跡第2号住居跡からは須恵器坏の出土はなく比較はできない。東山遺跡土器溜出土須恵器の中には類似したものがある。

A群土器の量的な僅少さから他の遺跡とは充分比較できなかった。したがって、ここではやや幅をもたせて、東山遺跡土器溜と家老内遺跡第2号住居跡から出土した土器の範疇の中でA群土器の時期を捉えておきたい。実年代については東山遺跡土器溜出土の灰釉陶器と安久東遺跡（土岐山：1980）第2号住居跡出土の灰釉陶器[註1]により9世紀中葉から10世紀前葉の間と考えることができよう。

B群土器（第1・4号土壙出土土器）

B群土器の特徴はつぎの3点に集約することができる。①赤焼土器が量的に土師器・須恵器を圧倒している。②器種の中では赤焼土器小皿が図示土器の約44%を占め、他器種よりも極めて高率を示す。③小皿・坏の切離し・調整技法は回転糸切り無調整であり、再調整のあるものは皆無である。この3点の特徴のいずれかに該当する土器がまとまって出土した遺跡には仙台市安久東遺跡・名取市清水遺跡（丹羽・小野寺・阿部：1981）・白石市植田前遺跡（加藤：1981）がある。これら三遺跡の遺構で最も良好な当該土器を出土したのは安久東遺跡の第2号住居跡、清水遺跡の第9号溝第1号土壙、植田前遺跡の第1・2溝状遺構である。しかし安久東遺跡と清水遺跡とは清水遺跡の報告の中で同時期と考えられていることから、ここでは遺溝の種類は異なるが安久東遺跡と植田前遺跡の出土土器を比較の対象とすることにしたい。

安久東遺跡第2号住居跡出土土器

土師器・須恵器・赤焼土器が計25点（図示分）出土している。土師器12点・須恵器3点[注2]・赤焼土器9点である。器種は土師器が坏・甕、須恵器が坏である。土師器坏は12点あり体部が内弩気味に外傾し口縁部が軽く外反するものが9点、しないものが3点ある。須恵器坏は体部の内弩が弱いか直線的なもので口縁部はそのまま丸くおさまるものである。赤焼土器坏は体部が内弯気味に外傾して口縁部が外反するものとそのままのものがある。土師器・須恵器・赤焼土器の坏の底部はすべて回転糸切り無調整である。甕は胴部で膨み頸部でしまり口縁部が外傾するものと胴部から屈曲なく口縁部に至るものとがある。ここでは鹿島遺跡と共通する土師器坏・赤焼土器坏を中心に比較検討してみたい。

B群土器と安久東遺跡第2住居跡出土土器との比較

坏は底部が回転糸切り無調整であり共通している。まず、土師器坏をみると鹿島遺跡の坏は安久東遺跡の坏よりも安久東遺跡が多い。口径：底径は安久東遺跡の坏が1：0.32～0.40（平約0.36）、鹿島遺跡の坏が1：0.33～0.44（平均0.39）でともに平均0.4以下である。口径を比較すると安久東遺跡のものは13㎝～16.7㎝であるのに対して鹿島遺跡の坏は11.6㎝～15.7㎝であり、口径は安久東遺跡の坏が大きい傾向を示している。

つぎに赤焼土器坏を比較したい。体部の形態は両遺跡とも共通しているが口縁部の外反するものはやや安久球遺跡の坏に多い。口径：底径は安久東遺跡の坏が1：0.27～0.44（平均0.36）、鹿島遺跡の坏が1：0.35～0.42（平均0.38）でともに平均0.4以下である。口径は安久東遺跡の坏が12㎝～14㎝であるのに対して鹿島遺跡の坏は11.7㎝～15.8㎝であり、鹿島遺跡が大きい傾向を示す。

第三に両遺跡の土師器坏・赤焼土器坏を遺跡ごとに口径で比較すると安久東遺跡では赤焼土器坏は土師器坏より小さな傾向が認められるのに対して、鹿島遺跡ではほぼ同じである。

さらに図示した土器を種別にみると安久東遺跡が土師器約56％・須恵器約11％・赤焼土器約30％であるのに対して、鹿島遺跡が土師器約20％・赤焼土器約80％であり、両遺跡には明瞭な相違がある。

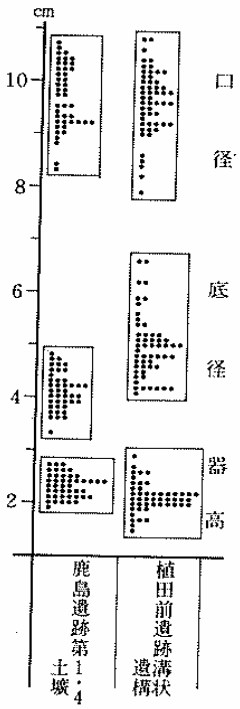
植田前遺跡第1・2溝状遺構出土土器

土師器・須恵器・赤焼土器が計72点（図示分）出土している。土師器7点・須恵器2点・赤焼土器63点である。器種は土師器が坏・高台付坏・甕、須恵器が甕、赤焼土器が小皿・高台付小皿・坏・高台付坏である。土師器高台付坏は体部が内弯気味に外傾するものと直線的に外傾するものがある。高台は低い三角高台である。内面は雑なヘラミガミで黒色処理が行われている。甕は胴部が直線的に立ち上り口縁部が強く外傾し短い。須恵器甕は口縁部が外反して端部

を上下につまみ出している。赤焼土器小皿は器壁が厚く、体部から口縁部は短く、強く外煩する。体部は直線的なもの、内弯気味のもの、外反気味のものなど多様である。高台付小皿も器壁が厚い。体部から口縁部へ直線的に外傾する。坏は体部が内弯気味に外傾し、口縁部が外反するものと外反しないものとがある。高台付坏は体部が直線的に外傾し口縁部が大きく外反するものと外反しないものがある。高台は高い三角高台である。なお、赤焼土器小皿、坏の底部はすべて回転糸切り無調整である。ここでは鹿島遺跡と共通し量的にまとまっている赤焼土器小皿・坏を中心に比較検討したい。

B群土器と植田前遺跡第1・2溝状遺構出土土器との比較

赤焼土器小皿・坏の底部は回転糸切り無調整であり、両遺跡に共通している。まず、小皿について比較したい（第2表）。両遺跡とも口径はほぼ8cm～11cmの間にあり相違は認められない。器高についても1.5cm～3cmの間にあり、分布に若干の差は認められるものの明瞭な相違は認められない。ところが底径には顕著な相違が認められる。植田前遺跡の小皿は底径が4.1cm～6.6cmを測り、5cm前後に集中するのに対して、鹿島遺跡の小皿は底径が3.3cm～4.8cmを測り4cm前後に集中する。器壁は植田前遺跡が鹿島遺跡より厚い。坏は体部が内弯気味に外傾し、口縁部が外反するものとしないものがあることでは両遺跡とも共通している。口径：底径は植田前遺跡の坏は1：0.32～0.52（平均0.40）であり鹿島遺跡の坏とは平均値で近似しているが、0.45を越えるものが10点中3点あり、数値の分布範囲がやや広くなっている。器壁は植田前遺跡の坏が鹿島遺跡の坏より厚い。口径についてみると植田前遺跡の坏は13.8cm～16.0cmを測り、ほぼ鹿島遺跡の坏の大きい部分と一致する。



第２表　小皿の法量

第三に両遺跡における赤焼土器小皿・坏を遺跡ごとに比較してみたい。植田前遺跡では坏口径の最小値が13.7cmで小皿口径の最大値が10.8cmであり、その差は2.9cmである。同様に鹿島遺跡の坏口径の最小値が11.7cmで小皿口径の最大値が10.7cmであり、その差は1.0cmである。つまり植田前遺跡では坏と小皿は法量的に明瞭に分離できるが、鹿島遺跡ではあまり明瞭ではないということが認められる。

この他、土師器高台付坏の高台が低い三角高台であることは両遺跡で共通しているが、植田前遺跡ではヘラミガキが粗雑であり内面底部に放射状ヘラミガキも認められない。また植田前遺跡高台付坏は鹿島遺跡のそれより器壁が厚い。

図示した土器を種別でみると植田前遺跡は土師器約11％・須恵器約3％・赤焼土器約86％であり、鹿島遺跡より赤焼土器の比率が高くなり土

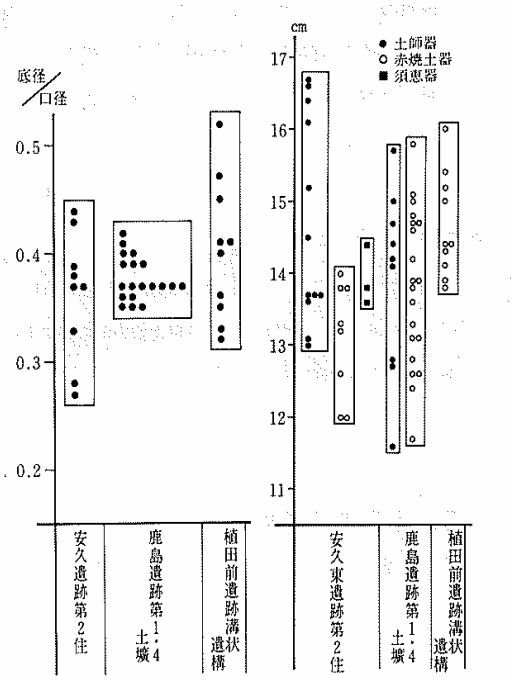
師器の比率が低くなっている。器種では植田前遺跡は赤焼土器小皿が全体の約68%を占め鹿島遺跡より高率である。土師器は植田前遺跡では坏が1点で高台付坏が5点であるのに対して鹿島遺跡では坏11点・高台付9点であり、両遺跡には認められる。

B群土器の編年的位置

B群土器と安久東遺跡第2号住居跡及び植田前遺跡第1・2溝状遺構出土土器を比較した結果をもとにB群土器の編年的位置について検討してみたい。まず、編年の軸となる土師器坏についてみてみたい。鹿島遺跡・安久東遺跡の坏は内面のヘラミガキが体部横方向・底部放射状であるのに対して、植田前遺跡の坏は粗雑なヘラミガキで、底部には放射状ヘラミガキが認められない。このことから前二遺跡の坏は植田前遺跡の坏より古く位置づけることができよう。鹿島遺跡の坏と安久東遺跡の坏は切離し技法・内面調整に共通点は認められるものの、器形において相違が認められる。すなわち、前者は後者より体部とりわけ体部下半の内弯の程度が大きい。また、口縁部の外反するものは前者より後者が多い。安久東遺跡第2号住居跡出土土器より古く位置づけられている家老内遺跡第2号住居跡出土の土師器坏の体部の内弯の程度は鹿島遺跡の坏より小さく、また口縁部は外反するものが多い。このことから、鹿島遺跡の土師器坏は安久東遺跡の土師器坏より新しく位置づけることが可能である。しかし、この二遺跡の土師器坏の形態差は僅少であることから、その時間差は少ないものと考えられる。

赤焼土器坏はB群土器・安久東遺跡とも器形・器壁厚・底部切離し技法に基本的な相違はない。しかし植田前遺跡では口径底径比の分布幅がやや広く、底径が前二遺跡より大きい傾向を示す（第3表）。赤焼土器小皿はB群土器と植田前遺跡では口径・器高・底部切離し技法に基本約な相違は認められない。しかし底径・器壁厚では植田前遺跡がB群土器より大きく、厚い。

つぎに土師器坏,赤焼土器坏・小皿の三遺跡における様相を法量とりわけ口径に注目してみてみたい（第4表）。安久東遺跡では坏口径は赤焼土器より土師器が大きい傾向を示す。B群土器の坏口径は土師器・赤焼土器ともほ同じである。植田前遺跡では比



第3表　赤焼土器坏の口径底径比　第4表　坏の口径

較対象になる土師器坏を欠くが、赤焼土器坏口径はB群土器坏の大きい部分に相当する。赤焼土器坏と小皿の口径差は植田前遺跡のほうがB群土器よりも大きい。

第三に土器を種別によってみると須恵器が極めて低率であることは三遺跡で基本的に共通している。土師器は安久東遺跡・B群土器・植田前遺跡の順に低率になり、赤焼土器は逆に安久東遺跡・B群土器・植田前遺跡の順に高率になる。

三遺跡における土器様相の相違は遺構の種類の違いはあるものの、以上の検討から編年的位置の相違と理解することができる。したがって、底剖回転糸切り無調整のみの土師器坏を含む土器群は安久東遺跡第2号住居跡→鹿島第1・4号土壙→植田前遺跡第1・2溝状遺溝の変遷が考えられる。

最後に実年代について検討したい。しかし鹿島遺跡自体では実年代を推定することはできない。安久東遺跡第2号住居跡からは灰釉陶器高台付坏（埦）が1点、床面に近い層から出土している。同住居内堆積土出土の土器と住居に伴う土器には形態・技法等に相違は認められない。したがって、灰釉高台付坏（埦）の年代と住居跡の年代は近接しているものと考えられる。この灰釉陶器高台付坏（埦）は器形・底部切離し技法及び調整技法・高台形態等の特徴から折戸53号窯式と同時期のものと考えられる。折戸53号窯式の年代は薬師寺西僧坊焼失の天禄4年（973）との関連から10世紀後半ごろと考えられている。（斎藤：1982・吉田：1982・楢崎：1983）。このことから安久東遺跡第2号住居跡も同年代と考えられる。一方、植田前遺跡出土土器については平泉藤原氏の時期の土器との類似性から12世紀ごろとされている。したがって鹿島遺跡B群土器の年代は11世紀代とすることができる。さらに、土師器坏の検討から安久東遺跡第2号住居跡出土土器とB群土器とは近接していると考えられることから、11世紀代でも前半頃に位置づけることができよう。

註　1）安久東遺跡第2号住居跡出土の灰釉陶器高台付坏（埦）の年代観についは、その後の研究成果によれば訂正する必要がある。B群土器の項で記述する。

註　2）安久東遺跡の報告で須恵器とされているものの中には赤焼土器も一部含まれている。したがって、後述する須恵器と赤焼土器は変更される可能性がある。

3．その他の遺物

瓦　丸瓦と平瓦の小片である。丸瓦は第3号住居跡堆積土から1点出土している凸面はヨコナデ調整が行われ、凹面には布目痕と粘土紐痕がみられる。平瓦は3点ある。第1号溝跡第1層から凸面ヘラケズリ調整・凹面布目のものと凸面縄叩き・凹面布目のもの各1点出土している。もう1点はＤＢ－119グリット住居跡カマド出土のもので、凸面縄叩き・凹面布目である。これらの遺構はすべて平安時代であることから、瓦につても同時代と考えておきたい。

中世陶器　無釉の甕体部破片が1点出土している。内面には接合痕・ヨコナデ調整がみられ外面には簾状格子目の押印が接合痕に沿って連続してみられる。外面はにぶい橙色、内面は明るい褐色を呈する。常滑製品で時代は鎌倉時代と考えられる。

鉄製品　鉄鏃・刀子・「半月形鉄製品」がある。鉄鏃は第1号土壙第1層から2点・第2号溝跡第1層から1点計3点出土している。3点とも鏃身は長く、平根柳葉形で逆刺はない。篦被は短く、茎は長い。3点とも第1層からの出土ではあるが、第1号土壙・第2号溝跡からはB群土器のみが出土していることから、ほぼB群土器の年代―11世紀前半頃―と同じと考えられる。刀子は第1号住居跡から1点・第2住居跡から2点・第2号溝跡から1点計4点、ともに第1層から出土している。刀身は平造り平棟であり、両関と刃関のものがある。平安時代と考えられる。「半月形鉄製品」は第2号住居跡の床面から1点出土している。刃部は弯曲しているが中央部は凹んでいる。背部は直線的である。両端に釘が各1個遺存している。片面に一部木質が認められる。同様の形態の鉄製品は関東・東北地方で出土しており穂摘み具と考えられる（佐々木：1975）。第2号住居跡はA群土器とさほど違わない時期と考えられることから、同住居跡出土の「半月形鉄製品」の年代も同様に考えることができよう。

Ⅴ．遺構と遺跡の検討

精査された遺構はすべて平安時代に属するものであり、また確認調査によって出土した土師器もすべて平安時代のものである。したがって鹿島・竹之内両遺跡は平安時代を中心とする時期の遺跡と理解することができる。精査された遺構についてみると第1・4号溝跡はB群土器を含むことから、B群土器と同時期と考えられる。第2号住居跡は住居跡に伴う土器が少なく、時期比定は困難であるがA群土器あるいはそれに近い時期と考えられる。第3号住居跡・掘立柱建物跡からは小片の土器が少量出土している。この二遺構からはB群土器に特徴的な赤焼土器小皿が1点も確認されていないこととB群土器よりは須恵器の量が多いことから、B群土器の時期よりは古く位置づけられる可能性がある。甕を倒位に埋置した遺構は両遺跡で各1基検出されているが骨（粉）が検出されていなことから火葬墓と考えるには問題がある。

確認調査の成果を含めて両遺跡をみると、両遺跡はそれぞれ独立した自然堤防に立地している。鹿島遺跡は東西約80m・南北約70mの範囲に、また竹之内遺跡は東西・南北とも約20mの範囲にそれぞれ遺構が認められる。したがって両遺跡の規模はそれぞれの自然堤防と密着な関連を有していることが認められる。

引 用 文 献

阿 部 義 平　1968　「東国の土師器と須恵器」『帝塚山考古学』　1

氏 家 和 典　1957　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14

小笠原好彦　1976　「東北地方における平安時代の土器についての二三の問題」『東北考古学の諸問題』

小 川 貴 司　1979　「回転糸切り技法の展開」『考古学研究』　101

加 藤 道 男　1981　「植田前遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第81集

経済企画庁　1967　『土地分類基本調査ー地形・表層地質・土じょうー仙台』

斉 藤 孝 正　1982　「猿投窯における灰釉陶の展開」『月刊考古学ジャーナル』211

佐々木和博　1975　「『半月形鉄製品』について」『史館』8

白 鳥 良 一　1980　「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要』　Ⅶ

楢 崎 彰 一　1983　「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡分布調査報告』　Ⅲ

丹 羽　　茂　1983　「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集

丹羽茂・小野寺祥一郎　・阿部博志　1981　「清水遺跡ー東北新幹線関係遺跡調査報告書5」『宮城県文化財調査報告書』　第77集

真 山　　悟　1981　「東山遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』　第81集

真 山　　悟　1981　「家老内遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第81集

森　　貢 喜　1983　「佐内屋敷遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ」『宮城県文化財調査報告書』第93集

吉 田 恵 二　1982　「緑釉陶と灰釉陶との相関関係とその編年について」『月刊考古学ジャーナル』211

参 考 文 献

川崎利夫・安部実　1981　「境興野遺跡発掘調査報告書」「山形県埋蔵文化財調査報告書」第46集

木本元治・竹谷陽一郎ほか　1982　「鳴神・柿内戸遺跡ー東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅴ」『福島県文化財調査報告書』第101集

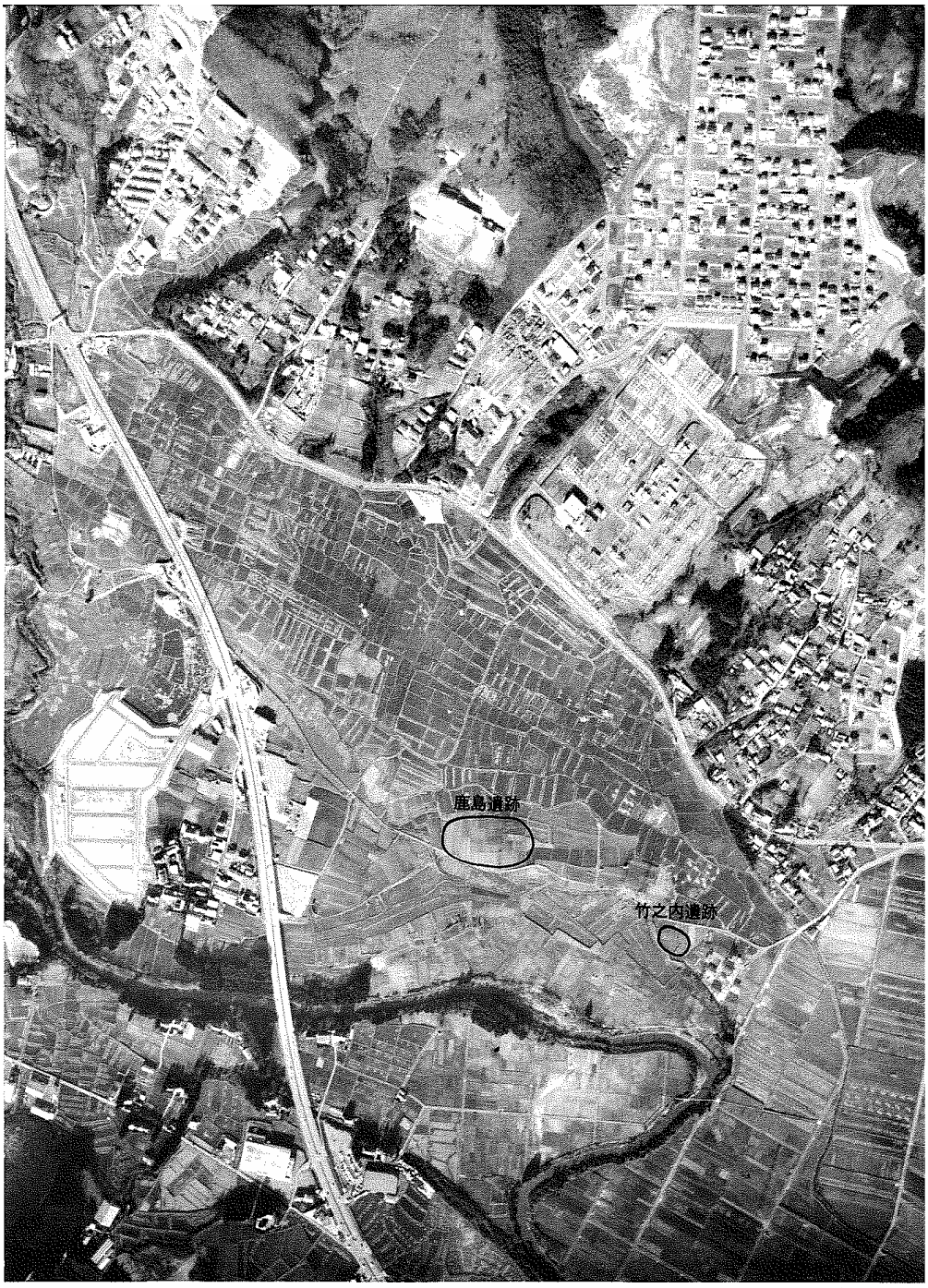
斉 藤 孝 正　1983　『正家1号窯　発掘調査報告書』　恵那市教育委員会

鈴木雄三・阿久津直子　1983　「馬場中路遺跡」『郡山東部』Ⅲ　郡山市教育委員会

本 沢 慎 輔　1983　「柳之御所跡発掘調査報告書ー第11・12次発掘調査概報」『岩手県平泉町文化財調査報書』第1集

本 堂 寿 一　1980　「極楽寺伝座主坊跡緊急発掘調査報告ー付、寺院跡出土土器の再整理とその考察ー」『北上市立博物館研究報告』第3号

宮城県多賀城調査研究所　1981　「多賀城跡」『宮城県多賀城調査研究所年報』1980

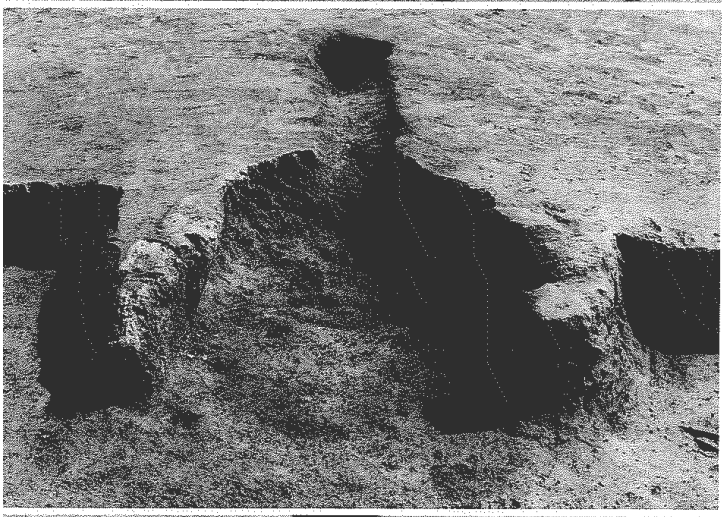


図版Ⅰ

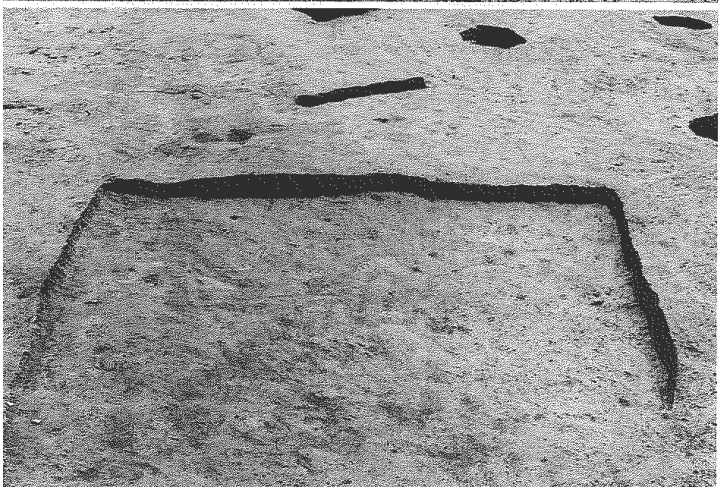
鹿島遺跡・竹之内遺跡空中写真

図版Ⅱ

第２号竪穴住居跡



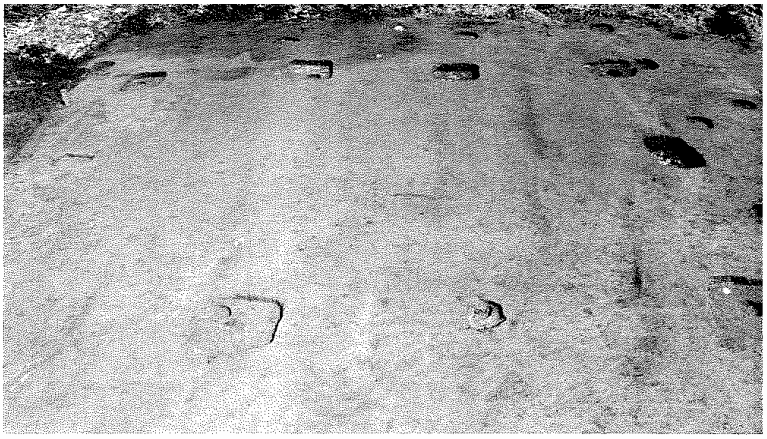
第２号竪穴住居跡
カ マ ド



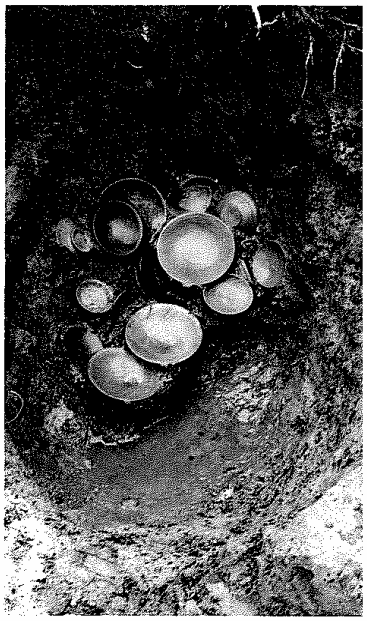
第３号竪穴住居跡

図版Ⅲ

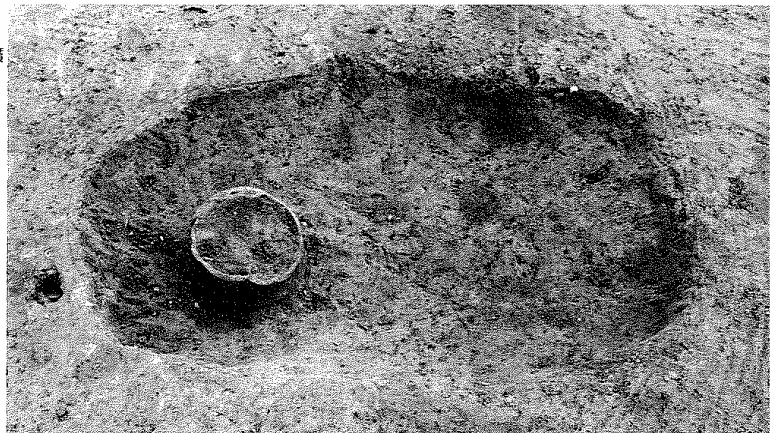
掘立柱建物跡



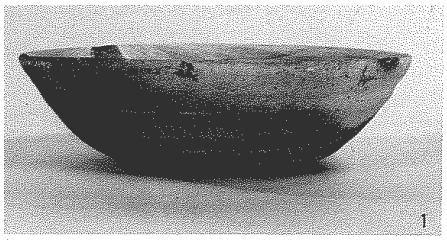
左：第１号土壙遺物出土状況
右：第４号土壙遺物出土状況

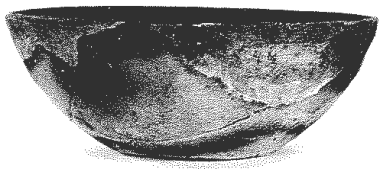


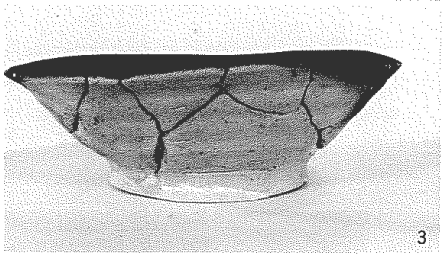
第５号土壙

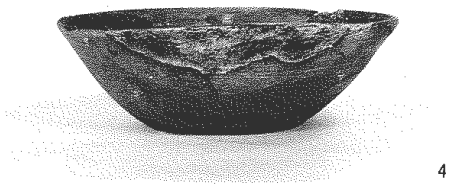


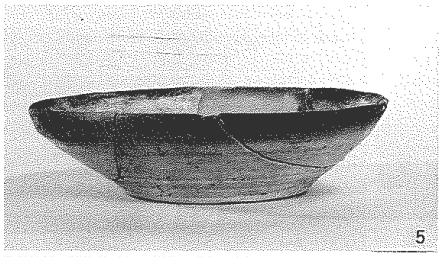
図版Ⅳ

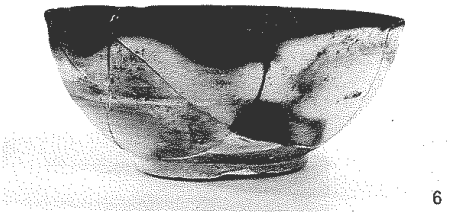

1

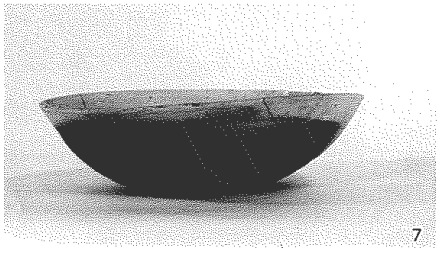

2

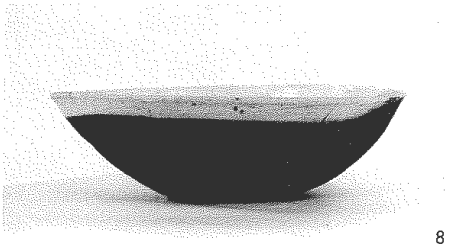

3

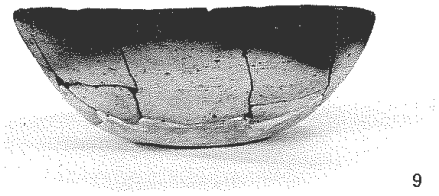

4

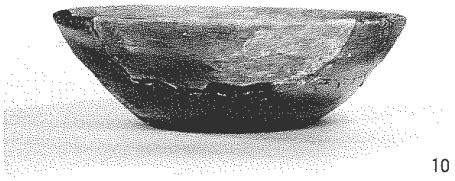

5


6


7


8

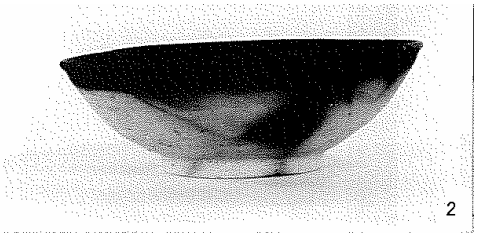

9


10

11

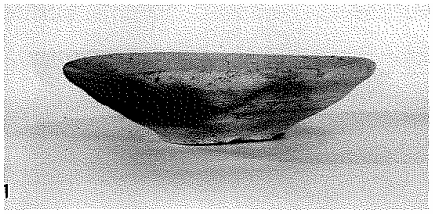
1．第３図５　　２．第３図２
３．第５図１　　４．第５図２
５．第５図３　　６．第９図１
７．第21図５　　８．第21図９
９．第23図３　　10．第24図４
11．第22図１

図版Ⅴ

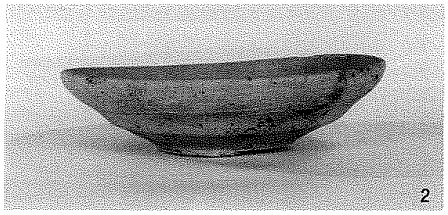


1．第15図６　　２．第15図10
３．第15図９　　４．第19図８
５．第18図14　　６．第20図１
７．第19図10　　８．第20図２
９．第20図３　　10．第20図４
　　11．第20図５

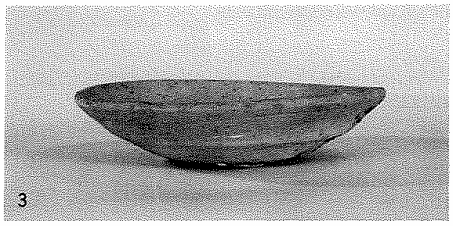
図版Ⅵ



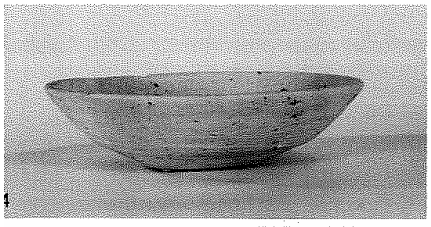
第17図 1



第17図19



第17図17

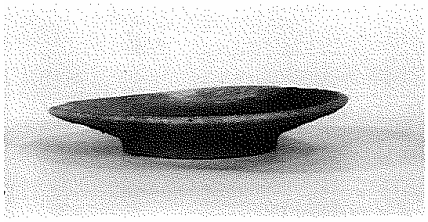


第18図 2

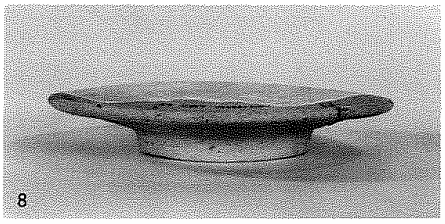
第17図 7

第18図10

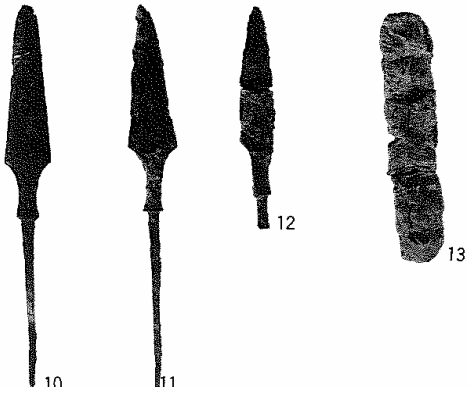
第18図11



第18図12



第19図 9



10. 第12図14
11. 第10図 1
12. 第12図15
13. 第 5 図10